

高槻市文化財調査概要 XVIII

嶋上遺跡群 17

上
巣

1 9 9 3

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査概要XVIII

嶋上遺跡群 17

はしがき

島上郡衙跡附寺跡は、昭和46年5月に史跡指定を受け、永く後世に残されることになりました。これまでの周辺部における調査・研究から島上郡衙跡は、郡衙と郡寺・山陽道跡が有機的に関連していることがあきらかとなり、各地域で発見されている郡衙関連遺跡のなかでも実態の良くわかる遺跡として高く評価されているところです。このような貴重な文化遺産を保存し活用することが今日の文化財行政の大きな責務となっています。昨年度におきましては、保存管理計画書を作成し、史跡の今後のるべき姿を探っているところです。

一方では、周辺部は住宅地としての開発がつづき、かつての田園風景はおおきく様がわりしております。今年度も個人住宅の建設を中心に数多くの発掘調査が実施されました。なかでも、郡衙西南隅部の「高津」という字名のある地域は以前から郡庁院の存在が指摘されるなど、島上郡衙の解明にとって重要視されてきた地域です。この数年来の調査によって並倉を含む倉庫群などが数多く検出されています。今年度におきましても大型の建物などが検出され、この地域に「正倉」が置かれていたものと推定され、ひきつづき慎重に検討を加えてゆきたいと考えております。

島上郡衙周辺部では郡家本町遺跡や郡家今城遺跡の調査が実施されました。両遺跡は島上郡衙と密接に関連のある遺跡として注目されていますが、郡衙成立以前の状況を知る資料と郡衙と同時期の集落を知る資料がえられております。また、宮田遺跡は島上郡衙が衰退したあと出現する遺跡として知られておりますが、今年度の調査でも集落の一部が検出され、中世集落の構造を知る手掛かりがえられたものと考えております。一方、貴重な有舌尖頭器などが出土したことから、本書では研究の便を図るために、これまでの本市での出土例をまとめてみました。

このような開発行為にともなう発掘調査の成果について概要をまとめましたが、今後の史跡保存管理や島上郡衙をはじめとする三島地方の古代史研究にとって有意義な資料を提供するものと考えております。

最後に、本書をまとめるにあたりご教示やご協力を願いした多くの方に、こころから感謝を申しあげます。

平成5年3月31日

高槻市教育委員会

社会教育課長 森川 久男

例　　言

1. 本書は高槻市教育委員会が平成4年度国庫補助事業（総額9,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・島上郡衙跡附寺跡周辺部および市内遺跡群の発掘調査事業の概要報告書である。

2. 事業は高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成4年4月20日に着手、平成5年3月31日に終了した。

3. 調査は高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は大船孝弘、橋本久和、高橋公一、中村剛彰がおこない、分担は文末に記した。出土遺物の写真撮影は清水良真が担当した。遺物整理については以下の各氏の援助をうけた。厚く感謝する。

白銀良子・原島俊子・藤原敏子・藤田伴代・橋本京子・西田佳子・温田育子

4. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

星野龍司・長澤英夫・石田耕三・横山浩明・矢田峯生・高谷健三・山本卯一
久保田芳邦

(順不同、敬称略)

目 次

I 島上郡衙跡	1
II 郡家本町遺跡	21
III 郡家今城遺跡	24
IV 宮田遺跡	36
V まとめ	43

No	遺跡名(地区)	調査地	面積(m ²)	申請者
1	島上郡衙跡 (85-N)	今城町186-11, 188-12	113.57	星野龍司
2	" (24-B)	郡家新町332-1	310.0	長澤英夫
3	" (4-B)	郡家本町38-12	707.0	久保田芳邦
4	" (45-L)	郡家新町261	1,213.0	石田耕三
5	郡家本町遺跡	郡家本町1000-11	137.08	積山浩明
6	郡家今城遺跡 (92-1)	郡家新町65	357.82	矢田峯生
7	" (92-2)	今城町27-1	436.0	高谷健三
8	宮田遺跡	宮田町3丁目94-1, 95	328.5	山本卯一

平成4年度 市内遺跡発掘調査地一覧

I 島上郡衙跡

1. 島上郡衙跡（85-N地区）の調査

高槻市今城町186-11、186-12番地にあたり、小字名は中久保と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部南端に位置し、西国街道より南側約250mの地点である。この付近一帯はこれまでの調査結果から、5世紀中頃～6世紀前半にかけての川西古墳群が濃密に分布していることが確認されている地域である。

調査は届出地がすでに宅地化されていることから、南端部に2m×3mのトレンチを設け、層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（1.3m）、旧耕土（0.2m）、床土（0.3m）、暗灰色土層（地山）である。今回の調査区内は狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができず、方形周溝墓群や川西古墳群の広がりについても、新しい知見を得ることができなかった。

（大船）

2. 島上郡衙跡（24-B地区）の調査

高槻市郡家新町332-1番地にあたり、小字はクワヅカと称する。現状は水田である。このたび個人住宅建築工事が計画され、土木工事に伴う発掘届が提出されたため事前に発掘調査を実施した。なお西側に計画された店舗新築工事に先立つ調査についても、一括して報告する。

調査地は芥川庵寺の北約100mに位置し、1982年に調査した14-J、N地区の南にあたるのをはじめ、1985年に東隣、西側の南



図1. 85-N地区調査位置図



図2. 24-B地区調査位置図

がすでに調査済であり、掘立柱建物4棟、竪穴式住居8棟ほか土壙、柱穴を多数検出しておおり、関連遺構の存在が予想された。調査は重機を使用して届出の範囲に従い東西に排土を反転しておこなった。

遺構（図版第2～4・59）

基本的な層序は、耕土（0.2m）、黄褐色土層（0.15m）、暗茶褐色粘土層〔遺物包含層〕（0.6m）、黄褐色粘土〔地山〕であり、地山には礫を多く含んでいる。遺構面の標高は約18.5mを測る。

検出した遺構は掘立柱建物1棟、竪穴式住居1棟、井戸1基、土壙23基のほか柱穴多数がある。柱穴は東側で集中的に検出した。掘形は0.2m～0.5m、深さ0.2m前後であったが建物としてのまとまりは欠いていた。なお、土壙19～23は遺物がほとんど出土せず、埋土堆積状況などから風倒木により形成されたと考えられるため、記述は省略した（図版中では網点で表現）。

住居跡1は調査区中央北で検出した。一辺約4mの方形を呈し、幅0.2m、深さ0.1mの周溝をもつ。周壁及び南3分の1は削平を受けており検出できなかったが、床面中央やや西寄りから弥生時代後期末の壺、器台、甕がまとまった状態で出土した。出土状況からみて正立して置かれてあったと考えられ、廃棄時になんらかの祭祀が行なわれたのかもしれない。埋土は暗茶褐色粘土である。

建物1は調査区北西隅で検出した。3間（柱間1.3m）×3間（柱間1.3m）で面積は約16m²を測る。柱通りの方向はN-30度-Wである。柱穴掘形は直径約0.5mの円形で深さ約0.3mを測る。埋土は暗茶褐色粘土で少量の土器片が出土した。また、建物1と重複して4個の柱穴列を検出した。柱穴掘形は長径約0.4m、深さは約0.2mを測り、柱穴埋土は暗茶褐色粘土で土師器片が少量出土した。柵と考えられたが建物の柱穴とは切りあっておらず、前後関係は不明である。

井戸1は調査区西南隅で検出した。掘形は直径3.1m、短径2.6m、底径0.85mの楕円形を呈し、深さ約1.3mを測る素掘のものである。堆積状況から自然埋没と考えられるが、埋土中から遺物が出土しなかったため時期は不明である。

土壙1は建物1の北西で検出したもので、土壙2を切っている。長円形を呈し、長径1.5m、短径0.7m、深さ0.45mを測る。埋土は炭化物を含む黒色粘土で、弥生式土器、土師器、須恵器蓋杯などが出土した。

土壙2は土壙1の東側で検出した。長径2.1m以上、短径0.4m、深さ1.0mを測り、北側は調査区外に伸びている。埋土は黒褐色粘土で、弥生式土器、土師器、須恵器片が出土

した。

土壌3は土壌1の南で検出した。不定形を呈し、長径2.0m、短径1.0m、深さ0.4mを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土で弥生式土器、土師器、須恵器片が出土した。

土壌4は土壌3の南で検出したもので、土壌3、6を切っている。長円形を呈し、長径2.5m、短径1.7m、深さ0.4mを測る。埋土は暗灰色粘土で、土師器、須恵器片が出土した。土壌5は柵の柱穴で切られている。長円形を呈し、長径1.5m、短径0.8mを測る。埋土は黒褐色粘土で少量の土師器片が出土した。

土壌6は、土壌4の南で検出した。不定形を呈し、長径5.5m以上、短径5.0m、深さ0.55mを測る。西側は調査区外に伸びているが、複数の土壌が重複したものであると考えられ、調査区内で最大規模の土壌である。埋土は下層が黒褐色粘土、上層が暗茶褐色粘土の2層に分かれており、下層からは主に弥生式土器片、上層からは土師器片、須恵器の蓋杯、高杯の脚部などが出土した。

土壌7は土壌4の東で検出した。不定形を呈し、長径2.5m、短径1.1m、深さ0.35mを測る。埋土は暗茶褐色粘土で少量の土師器片が出土した。

土壌8は住居跡1の南で検出した。不定形を呈し、長径2.0m、深さ0.5mを測る。埋土は黒色粘土で遺物は出土しなかった。

土壌9は土壌8の南で検出した。長円形を呈し、長径2.5m、短径1.5m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色粘土で遺物は出土しなかった。

土壌10、11は調査区の西南隅で検出した。ともに長円形を呈し、土壌10は、長径2.5m、短径1.1m、深さ0.35m、土壌11は長径2.5m、短径1.1m、深さ0.35mを測る。埋土は黒色粘土で、遺物は出土しなかった。

土壌12、13は住居跡1の東で検出した。ともに長円形を呈し、土壌12は長径2.2m、短径1.0m、深さ0.5m、土壌13は長径3.0m、短径1.1m、深さ0.45mを測る。いずれも埋土は茶褐色粘土で少量の須恵器片、瓦器片が出土した。

土壌14は土壌8、9の東で検出した。隅丸方形を呈し、長辺2.3m、短辺1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色粘土で少量の弥生式土器片が出土した。

土壌15は土壌14の東で検出した。長円形を呈し、長径3.5m、短径1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は茶褐色粘土で少量の弥生式土器片が出土した。

土壌16は調査区の東隅で検出した。長円形を呈し、長径3.5m、短径1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は茶褐色粘土で遺物は出土しなかった。

土壌17は土壌16の南で検出した。東は調査区外に伸びており、検出長1.5m、短径0.7m、

深さ0.3mを測る。埋土は黒色粘土で、ほぼ完形に近い弥生後期の有孔鉢、高杯、壺の他、少量の土器片が出土した。

土壤18は土壤17の南で検出した。長円形を呈し、直径3.5m、短径0.7mを測る。埋土は黒色粘土で少量の弥生式土器片が出土した。

遺物(図版第5・図3~5)

今回の調査区からは、コンテナ十数箱分の遺物が包含層及び各遺構より出土しているが、完形に復元し得たものは少ない。

住居跡1からは、弥生時代後期末の壺、器台、壺が出土している。壺(1)は口径13.2cm、器高20.6cmを測るヘラ描き記号文をもつ広口壺である。球形の体部から頸部が上方に立ち上り口縁部で外反して、端部は面をもち、細凹線を2条有する。体部外面はタタキを施した後、頸部から中位にかけてていねいにハケ調整を行なっており、頸部外面はヨコナデ調整によって仕上げている。体部内面はハケ調整を施し、口頸部をヨコナデ調整によって仕上げている。色調は淡黄色である体部上面に8cm×9cm四方のヘラ描き記号文をほどこす。器台(3)は口径23.3cm、器高12.9cm、底径20cmを測る。口縁部は胸部から屈曲してほぼ水平に大きく伸び、端部下端に粘土紐を貼り付けて面を形成し、2条の凹線を施したうえ、下端にヘラで刻み目を入れる。胸部は筒状を呈し、4孔を穿つ。裾部は胸部から

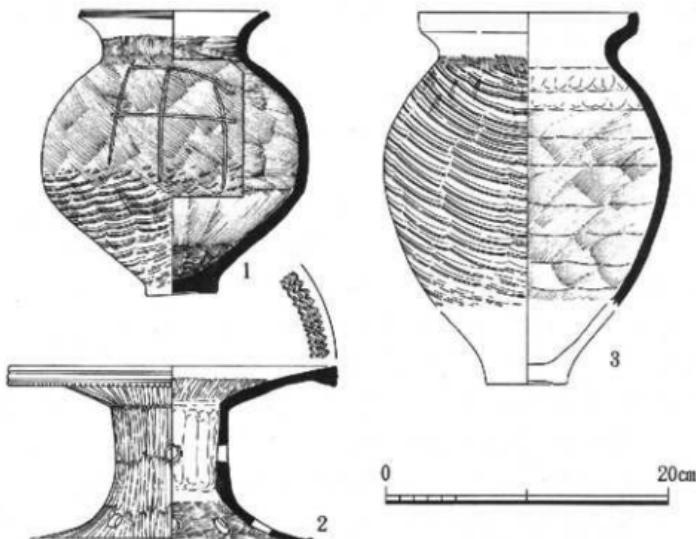


図3. 住居跡1出土土器(1~3)

大きく開き、端部は面を持つ。屈曲部に5孔を穿つ。外面はハケ調整の後ヘラミガキをていねいに施す。受部内面は横方向のハケ調整後、ヘラミガキを放射状に施した後、櫛描波状文を施す。胸部は縦方向に指ナデ調整。裾部は横ハケを施し、端部はヨコナデによって仕上げられている。色調は淡黄色である。壺(2)は口径15.5cm、現存高21cmを測る。長胴形の体部に受口状の口縁を有する壺である。底部は欠失している。口縁部はやや内傾し端部は面をもつ。体部外面は左上りのタタキを施し口縁部には接合面を整形する程度のハケ調整が施されている。体部内面はハケ調整が施されているが、接合痕が明瞭にのこっている。口縁部内外面はヨコナデ調整によって仕上げている。色調は淡黄色である。

土壤17からは有孔鉢、高杯、壺が出土した。有孔鉢(4)は口径23.8cm、器高6.2cmを測る小形品である。底部は丸みを帯びた平底であり、中央に口径1cmの1孔を穿つ。体部は斜め上方に緩やかに内窪しながら伸び、端部はわずかに面を持つ。外面はタタキを施した後、ヨコナデ調整。内面手法は不明だが口縁部はヨコナデ調整によって仕上げている。色調は暗褐色である。高杯(5)は口径13cm、現存高9.5cmを測る椀形杯部をもつ高杯である。裾部は欠失している。杯部は中実の柱状部から内窪しながら伸び、口縁部でわずかに立ちあがる。端部は丸くおさめる。杯部は内外面ともにハケ調整後、縦方向のナデ。口縁部はヨコナデ、柱状部は縦方向のナデを施している。色調は暗黄灰色である。壺(6)は、口径14.2cm、現存高12cmを測る小形の壺である。「叩き出し技法」により成形している。底部は欠失している。球形の体部に短く外反する口縁部を有し、端部は丸くおさめる。体部外面は、横方向のタタキを施し、内面はナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ調整によって仕上げている。色調は暗茶灰色である。

なお、住居跡1と土壤17から出土した土器は、森田克行の編年によれば、ほぼ摂津V-3~VI-0様式に相当する(森田克行「摂津地域」「弥生土器の様式と編年」1990年)。

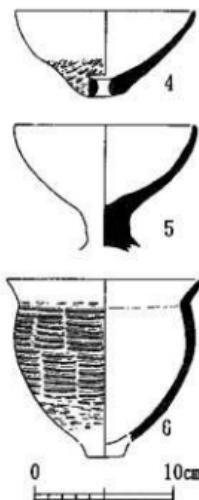


図4. 土壌17出土土器

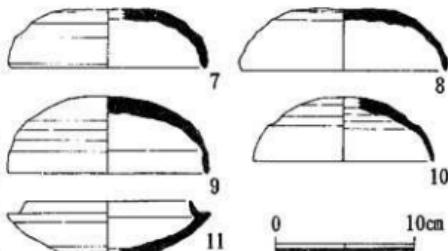


図5. 土壌1, 土壌3, 土壌6出土土器

土壤1、3、6からは、それぞれ6世紀後半に属する遺物が出土している。杯蓋(7)は口径14.7cm、器高4.1cmを測る。口縁部は下外方に下がり、端部は丸い。天井部は低く平らであり、外面約3分の1を回転ヘラ削り調整、他はナデている。色調は灰青色である。杯蓋(9)は口径14.6cm、器高4.5cmを測る。口縁部はほぼ垂直に下がり端部は丸い。天井部はやや高く丸く、外面3分の2を回転ヘラ削り調整、他は、ナデている(天井部内面中央一定方向のナデ調整)。色調は灰白色である。杯身(11)は口径12.2cm、器高4.0cmを測る。たちあがりは内傾して伸び、端部は丸い。受部はやや外上方に伸び、端部は丸い。底体部は平らに近く、外面約3分の1を回転ヘラ削り調整、他はナデしている(底体部内面中央一定方向のナデ調整)。色調は青灰色である。杯蓋(8)は口径14.6cm、口径4.5cmを測る。口縁部は下外方へ下がり、天井部は低く平らで、外面約3分の1を回転ヘラ削り調整、他はナデしている(天井部内面中央一定方向のナデ調整)。色調は淡青灰色である。杯蓋(10)は口径13.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部は下方に下り端部は丸い。天井部はやや高く丸い。外面約2分の1を回転ヘラ削り調整、他はナデしている。色調は青灰色である。

小 結

今回の調査では芥川廃寺に直接関わる遺構は検出されなかったが、寺跡の北方に位置する弥生時代以降の集落跡の一部を検出することができ、1982、1984年度の調査区の間を埋めることになった。

住居跡については、東隣の調査区で住居跡1と同規模の方形堅穴式住居跡が8棟検出されているが、いずれも時期は不明確であった。今回の調査では住居跡1が弥生時代後期末と判明したことから、これらの住居跡もほぼ同時期に求められる。

掘立柱建物は隣接区でこれまでに4棟検出されている。いずれも軸方向はN-17度~21度-Wにおさまり、郡衙跡の建物軸方向の年代観からみて7世紀後半に推定される。

今回検出した建物は、軸方向がこれよりもさらに西に振っているものの、ほぼ7世紀代におさまるとみてよいであろう。

土壤は隣接調査区と同様多数検出された。半数以上の土壤埋土中から6世紀後半と考えられる土器片が出土しており、ほかの土壤もおおむね同時期と考えられる。

平安時代以降については、わずかに瓦器片を数点見出した程度で、遺構として確認できるものはない。ただ、小柱穴がいくつか検出されており、隣接調査地では同規模の柱穴から瓦器片が数点出土していることなどから、そのなかには中世まで下がるものがあると思われる。

(中村)

3. 嶋上郡衙跡（4-B地区）の調査

高槻市郡家本町38-12にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅の建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は郡家本町の丘陵裾部にあたり、周辺部の調査では弥生時代後期から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

調査は届出地の中央部に1m角の試掘場を3箇所設けて人力で掘削した。基本的な層序は盛土（0.5m）、青灰色砂質土（0.2m）、褐色土（0.6m）〔遺物包含層〕で地山は黄褐色砂礫である。

各試掘場の地山面の精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物包含層からは埴輪の破片が若干出土した。

今回の調査では、明確な遺構は確認できなかったが、嶋上郡衙北部から郡家本町の丘陵部にかけて古墳時代の遺構が広がっている可能性を指摘することができる。（中村）

4. 嶋上郡衙跡（45-L地区）の調査

高槻市郡家新町261番地に位置し、現状は水田である。宅地開発に先立ち、発掘調査を実施した。

調査地は史跡指定地の南側に隣接し、小字名を「高津」といい、藤沢一夫氏が郡庁院の存在を想定した地区である。今回の調査区に西接する45地区および西南に位置する55地区では、1986年度の調査で奈良・平安時代の倉庫と思われる大規模な縦柱建物が検出され（「45-J・K・N・O地区の調査」、「55-



図6. 4-B地区調査位置図



図7. 45-L地区調査位置図

A・B・E・F地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』1987年）、1990年度の調査でもこれに連なる建物の存在が確認されている（「55-C・G地区の調査」『嶋

上遺跡群16』1992年)。今回の調査でも同様の遺構の存在が予想された。

なお、今年度はこれの南側(45-P、55-D地区)、西南側(45-N・O、55-B・C地区、55-F・G地区)についても順次調査をおこなったので、一括して扱うこととする。

遺構(図版第6~30、61~62)

調査区は南北の通路(1990年度の調査区)をはさんで、東西に分けられる。このうち東側をA区、西側北半をB-1区、南半をB-2区とする。

地表下約0.5m、標高15.2~15.4mに遺構検出面があり、A区北半では暗褐色砂礫、A区南半とB区東半は黄褐色粘土、B区西半は自然流路の堆積とみられる黒灰色粘土および灰白色砂質粘土となっている。遺構は調査区のほぼ全面にわたって検出されるが、砂礫質の強くなるA区の東北部は希薄であり、B-2区西南部自然流路上では遺構は皆無の地域となっている。

検出遺構には、弥生時代の土壙、古墳時代の竪穴式住居7棟、奈良・平安時代の掘立柱建物30棟、檻列4条、溝のほか、性格の不明な不定形土壙などがあるが、主なものについて記す。このうち掘立柱建物と檻列の遺構番号については、便宜上、1986年度調査を踏襲し、通し番号で設定した。また、方位は磁北を使用した。

(1) 奈良時代以前の遺構

土壙SK1はA区北端で検出した、円形ですり鉢状の土壙である。直径2.5m、深さ1.0mを測り、弥生時代後期の土器が出土した。

竪穴式住居SH1は、A区北部で検出した。平面形は一辺5.5mの方形で、周壁溝の幅は0.3~0.4m、深さは0.3mを測る。上面がかなり削平され、周壁溝内側と外側が同レベルとなっており、掘立柱建物SB11・12・13・14に一部を切られている。

SH2はSH1の東南で検出した。一辺3.7mの方形の住居を改築し、一辺5.0mに建て替えている。周壁溝幅はどちらも0.2m、深さは0.1~0.15mを測る。SB14に切られてしまい、5世紀前半の須恵器が出土している。

SH3はA区南半中央で検出した。北壁は削平のため不明だが、一辺5.0mの方形に復元できる。床面までの深さは0.1mである。SB22、溝SD1に切られている。

SH4はSH3の西南で検出した。東西4.2m、南北3.7mの長方形の平面をもつ。床面までの深さは0.1mを測る。SB23、SD1に切られている。

SH5はA区南端で検出した。西辺を壊されているが、一辆4.0mの方形で、東北壁と東南壁に周壁溝がみられる。幅は0.2m、深さ0.05m、床面までの深さ0.15mを測る。SB23、SD1に切られている。古墳時代中期の土器や鉄滓が出土している。

S H 6はB-1区の東北隅でその一部を検出した。周壁溝はみられず床面までの深さは0.15mである。一辺4mほどの方形の住居に復元できる。S B31に切られている。

S H 7はB-2区東半中央で検出した。長辺4.0m、短辺3.5mの長方形で、深さは0.4mを測る。周壁溝、柱穴ともに検出できなかったが、堅穴住居としておく。S B39・40に切られる。埋土からは古墳時代中期の土器が出土している。

溝SD1はA区中央をN-20度-Eの角度で南北に走り、南端から36mで一旦途切れ、6mの間隔をおいてさらに11m伸びている。幅0.7~0.8m、深さ0.3mを測り、古墳時代後期の土器が出土している。S B20・21をはじめとして掘立柱建物の柱穴に切られている。

(2) 奈良・平安時代の遺構

掘立柱建物S B11はA区北半で検出した東西棟である。桁行4間(9.8m)、梁行3間(4.7m)、主軸の方位はN-8度-Eである。柱穴は一辺1mの方形のものや直径0.4mほどの円形のものもあり、やや不揃いである。深さは0.3mを測る。

S B12はS B11の南で検出した。桁行2間(4.5m)、梁行2間(4.3m)の正方形にちかい東西棟で、方位はN-5度-Eである。柱穴は一辺0.7~0.4mの隅丸方形ないし直径0.7mの円形、深さは0.2mである。

S B13はS B12と重複している。桁行3間(4.8m)、梁行3間(3.6m)南北棟で、方位はN-7度-Wである。柱穴は直径0.5mの円形で深さ0.3mを測り、南東隅の柱穴を欠いている。

S B14はS B12の東で検出した縦柱建物である。桁行3間(4.4m)、梁行2間(3.8m)の東西棟で、方位はN-12度-Wである。柱穴は一辺0.6~0.7mの方形、深さは0.4mである。西妻柱穴が柱を抜き取られたためか変形している。

S B15はA区中央西寄りで検出した。桁行3間(4.3m)、梁行2間(3.8m)の東西棟で、方位はN-9度-Wである。柱穴は直径0.3~0.5mの円形で、深さ0.4mを測る。

S B16はS B15と重なって検出された。桁行2間(4.7m)、梁行2間(4.4m)の東西棟で、方位はN-5度-Eである。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形ないし直径0.3~0.6mの不定円形、深さは0.2m、北東隅柱穴には直径0.2mの柱根が遺存していた。

S B17はS B15・16と重なっている。桁行2間(4.4m)、梁行2間(4.0m)の東西棟で、方位はN-23度-Wである。柱穴は直径0.5mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。なお、S B15・16・17は重複しているが、柱穴の切り合いがないため、直接的な新旧関係は明確でない。

S B18はS B16の東で検出した。桁行2間(4.3m)、梁行2間(4.3m)の正方形の平

表1 堀立柱建物一覧表

番号	種類	桁行	梁行	方位	備考
S B 1	総	3間・4.5m	3間・3.9m	N-5度-E	柱根、礎盤遺存
S B 2	総	3間・5.2m	3間・4.2m	N-5度-E	
S B 3	総	3間・4.5m	2間・3.6m	N-5度-E	柱根遺存
S B 4	総	3間・4.5m	3間・3.6m	N-9度-E	3より新
S B 5	側	3間・9m以上	3間・7.0m	N-9度-E	
S B 6	側	4間・7.2m	1間・4.2m	N-9度-E	3・4より新
S B 7	総	3間・5.4m	3間・5.1m	N-9度-E	
S B 8	側	5間・8.4m	3間・4.5m	N-24度-W	5より古、南・西に庇
S B 9	側	4間・6.0m	2間・3.0m	N-32度-W	
S B 10	側	4間・5.6m	2間・4.5m	N-16度-W	
S B 11	側	4間・9.8m	3間・4.7m	N-8度-E	
S B 12	側	2間・4.5m	2間・4.3m	N-5度-E	
S B 13	側	3間・4.8m	3間・3.6m	N-7度-W	
S B 14	総	3間・4.4m	2間・3.8m	N-12度-W	
S B 15	側	3間・4.3m	2間・3.8m	N-9度-W	
S B 16	側	2間・4.7m	2間・4.4m	N-5度-E	
S B 17	側	2間・4.4m	2間・4.0m	N-23度-W	
S B 18	側	2間・4.3m	2間・4.3m	N-3度-E	
S B 19	総	2間・3.4m	2間・3.0m	N-7度-W	
S B 20	側	3間・5.5m	1間・4.2m	N-24度-E	
S B 21	側	3間・5.7m	1間・4.3m	N-16度-E	20より新
S B 22	側	2間・3.9m	2間・3.9m	N-14度-E	
S B 23	側	3間・5.0m	2間・3.6m	N-6度-E	
S B 24	総	3間・5.3m	3間・4.4m	N-5度-E	柱根遺存、桁行は推定
S B 25	側	4間・7.2m	2間・3.9m	N-5度-E	
S B 26	側	4間・6.6m	2間・3.9m	N-10度-W	
S B 27	総	2間・3.7m	2間・3.7m	N-30度-W	
S B 28	側	4間・6.6m	2間・3.9m	N-10度-W	
S B 29	側	4間・6.4m	2間・3.8m	N-10度-W	
S B 30	側	3間・5.4m	3間・5.0m	N-17度-W	
S B 31	側	6間・17.1m	3間・6.3m	N-5度-E	北3間分に床束あり
S B 32	側	4間・7.2m	2間・5.0m	N-5度-E	

S B 33	側	3間・4.0m	2間・2.5m	N-16度-W	桁行は推定
S B 34	側	3間・5.8m	2間・3.7m	N-16度-W	桁行は推定
S B 35	側	2間・3.8m	2間・3.1m	N-24度-W	
S B 36	側	5間・8.0m	2間・ ^{北 8.0m} _{南 2.5m}	N-13.5度-W	間仕切り有り
S B 37	側	2間・3.2m	2間・3.2m	N-15.5度-W	
S B 38	側	4間・7.5m	2間・4.1m	N-7.5度-W	
S B 39	側	3間・5.4m	2間・3.7m	N-1.5度-E	
S B 40	側	3間・4.8m	2間・3.7m	N-0.5度-E	

(総一縦柱建物、側一側柱建物)

表 2 棚列一覧表

番号	規模	長さ	柱間寸法	方位	備考
SA1	6間(推定)	9.0m	1.3~1.5m	N-95度-E	東西柵
SA2	6間	10.7m	1.7~2.0m	N-5度-E	南北柵
SA3	4間	8.4m	2.1m	N-8度-E	南北柵
SA4	4間	5.5m	1.75m	N-5度-E	南北柵
SA5	6間	13.0m	2.0~2.5m	N-74度-E	東西柵
SA6	3間	6.6m	2.2m	N-80度-E	東西柵

面をもつ。方位はN-3度-Eである。柱穴一辺0.6mの方形ないし直径0.3~1.0の円形と不規則である。深さは0.2mを測る。

SB19はSB18の北東で検出した。東側は調査区外に延びるが、その一部を調査区壁面で確認しており、一応、桁行2間(3.4m)、梁行2間(3.0m)の東西棟に復元しておく。方位はN-7度-Wである。柱穴は直径0.2~0.3mの円形、深さ0.2mを測る。

SB20はSB18の南側に位置する。桁行3間(5.5m)、梁行1間(4.2m)の南北棟で、方位はN-24度-Eと大きく東に振れている。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形、ないし直径0.6~0.7の円形、深さ0.3mである。

SB21はSB20の柱穴を切ってつくられている。桁行3間(5.7m)、梁行1間(4.3m)で、SB20とほぼ同規模である。方位はN-16度-Eである。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形、ないし直径0.6~0.7の円形、深さは0.4mを測る。

SB22はSB21の南で検出した。桁行2間(3.9m)、梁行2間(3.9m)で、正方形の平面をもつ。方位はN-14度-Eである。柱穴は一辺0.5mの方形ないし直径0.6mの円形、

深さは0.3mを測り、その内の一つは土壌によって壊されている。

S B23はS B22の南に位置する。桁行3間(5.0m)、梁行2間(3.6m)の南北棟で、北妻柱穴を欠いている。方位はN-6度-Eである。柱穴は直径0.5~0.7mの円形、深さは0.4mを測る。

S B24はB-1北端で検出した総柱建物である。北側は調査区外であるが、桁行3間(5.3m)、梁行3間(4.4m)に復元しておく。方位はN-5度-Eである。柱穴は一辺約1.0mの隅丸方形、深さは0.55mを測る。東南隅柱穴には、直径0.3mの柱根が遺存していた。

S B25・S B26はS B24の南で検出した。両者は互いに重複しており、柱穴の切り合いからS B26が古い。S B25は桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.9m)の南北棟で、方位はN-5度-Eである。柱穴は一辺0.8mの隅丸方形、深さは0.25mを測る。S B26は桁行4間(6.6m)、梁行2間(3.9m)の南北棟で、方位はN-10度-Wである。柱穴は直径0.4~0.6mの円形ないし一辺0.6mの隅丸方形、深さ0.4mを測る。

S B27・S B28はS B26の東に位置し、S B28はS B27を切っている。S B27は桁行2間(3.7m)、梁行2間(3.7m)の総柱建物である。方位はN-30度-Wである。柱穴は一辺0.4~0.5mの隅丸方形、深さは0.3mを測る。S B28は桁行4間(6.6m)、梁行2間(3.9m)の南北棟で、方位はN-10度-Wである。柱穴は一辺0.6mの隅丸方形を呈し、深さは0.25mを測る。東南の一部をS D 2によって壊されている。

S B29はS B26の南で検出した。桁行4間(6.4m)、梁行2間(3.8m)の南北棟で、方位はN-10度-Wである。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形、深さは0.2mを測るが、西側柱列のはほとんどが削平されている。

S B30はS B29と重複して検出した。桁行3間(5.4m)、梁行3間(5.0m)の東西棟であるが、正方形に近い平面をもつ。方位はN-17度-Wである。柱穴は一辺0.6mの方形もしくは隅丸方形、深さは0.4mである。S B29およびS B30は、重複しているが柱穴の切り合いは無く、その新旧関係は明確でない。

S B31はその大半を1990年度の調査において検出している(掘立柱建物3)。今回の調査では、B-1区の東壁に沿って西側柱列を検出し、その全体が確認できたので、一連の通し番号に改称する。桁行6間(17.1m)、梁行3間(6.3m)の南北棟で、方位はN-5度-Eである。北3間分の中軸線上には床東とみられる柱穴がみられ、特異な構造となっている。柱穴は一辺0.9~1.2の方形を呈し、深さは0.6~0.7m、床東の柱穴はこれより小さく一辺0.6~0.8m、深さ0.3mである。

S B32・S B33はB-2区北東隅で重複して検出した。S B32がS B33の柱穴を切っておりS B32が古いことが明確である。S B32は、1990年度の調査でその一部が検出されており（獨立柱建物7）、今回の成果と合わせて規模が確定した。桁行4間（7.2m）、梁行2間（5.0m）の南北棟で、方位はN-5度-Eである。東側柱列は、S B31の中軸線に柱筋をそろえている。柱穴は一辺0.6~0.8mの方形を呈し、深さは0.3mを測る。S B33は北側柱列がB-2区の調査区外だが、B-1区ではその続きが検出されていないので、桁行3間（4.0m）に復元が可能である。梁行2間（2.5m）の南北棟で、方位はN-16度-Wである。柱穴は一辺0.4~0.5mの隅丸方形、深さは0.3mを測る。

S B34はS B31の西で検出した。北側柱列がB-2区の調査区外になるが、北東隅柱穴をB-1区の壁面で確認しており規模が判明する。桁行3間（5.8m）、梁行2間（3.7m）の南北棟で、方位はN-16度-Wである。柱穴は直径0.5mの不定円形ないし一辺0.5mの隅丸方形を呈し、深さは0.3mである。

S B35はS B34と重なっているが、柱穴は切り合っていない。北側柱列のうち一部がB-2区の調査区外であるが、桁行2間（3.8m）、梁行2間（3.1m）の南北棟に復元できる。方位はN-24度-Wである。柱穴は一辺0.5mの隅丸方形、深さは0.3mを測る。

S B36はB-2区中央北寄りで検出した。桁行5間（8.0m）、梁行2間の南北棟であるが、梁行長が北側の3.0mに対し、南側は2.5mと短い。また北から1間目には、間仕切あるいは床東の柱穴がある。当初はこの柱穴が他の柱穴に比べて遜色のない規模であることから、桁行4間の身舎に北庇がついたものと推定したが、その後、北側柱が同様の規模をもつことがわかり、上記のように解釈した。方位はN-13.5度-Wである。柱穴は一辺0.6m方形を呈するが、上面が削平されており、深さは0.2mである。

S B37はS B36の南で検出した。桁行2間（3.2m）、梁行2間（3.2m）の正方形の平面をもつ建物で、方位はN-15.5度-Wである。柱穴は一辺0.5~0.6の隅丸方形、深さは0.2mである。

S B38はB-2区中央で検出した。桁行4間（7.5m）、梁行2間（4.1m）の南北棟である。方位はN-7.5度-Wである。柱穴は一辺0.5~0.8mの方形を呈し、深さは0.5mである。

S B39・S B40はB-2区東壁に沿って重複して検出したが、1990年度の調査でその東半部を検出していた（獨立柱建物8・9）。今回の調査により規模が判明した。S B39は桁行3間（5.4m）、梁行2間（3.7m）の南北棟で、S B40の柱穴を切っている。方位はN-1.5度-Eである。柱穴は一辺0.6mの方形を呈し、深さは0.3mを測る。S B40は桁

行3間(4.8m)、梁行2間(3.7m)の東西棟で柱穴の一部を土壤に破壊されている。方位はN-0.5度-Eである。柱穴は一辺0.6mの方形、深さは0.5mである。

柵列SA3は、A区南端で検出した。4間(8.4m)の南北柵で、柱間は2.1m等間である。方位はN-8度-Eである。

SA4はB-1区東半、SB31の西で検出した。4間(5.5m)の南北柵で柱間は1.75m等間、方位はN-5度-Eである。

SA5はB-2区北東で検出した。その一部は1990年度調査で検出しており、今回みつかった4間を合わせ、6間(13m)を確認した。柱間は2.0ないし2.5mを測り、方位はN-74度-Eである。

SA6はSA5の南に位置し、SD3を切っている。3間(6.6)の柵列で、柱間は2.2m、方位はN-80度-Eを測る。

溝SD2は、B-1区の東半で検出した南北溝である。長さ11m、幅0.5~2.0m、深さ0.2mを測り、方位はN-5度-Eで、すぐ東に位置するSB31、SA4と同角度である。

SD3はSA6に切られる溝で、1990年度調査区でも確認されている。長さ13m以上、幅0.6m深さ0.1mと浅い溝である。方位はN-80度-EでSA6と同様の角度をしめす。

SK2は、B-1区東端で検出した土壤である。長さ8.0m、幅4.0mの、深さ0.45mのやや不定形の土壤で、8世紀初頭の土器がやまとまって出土した。

遺物(図版第31~34)

各遺構や包含層から整理箱約100箱分の遺物が出土しているが、そのうちの主なものについて記す。

広口壺1、2はSK1から出土した。丸い体部に外反する口縁をもち、端部は肥厚して面をなす。体部外面はヘラミガキ調整を施す。1は口径14.5cm、最大腹径25.0cm、器高29.1cmを測り、色調は淡褐色を呈する。2は口径13.5cm、最大腹径23.4cm、器高29.2cmで色調は橙褐色である。

3はSH5から出土した出土した土師器高杯で、脚部分を欠失する。椀型の杯部口縁は丸くおさめる。口径14.0cm、現存高5.9cm、内面は灰褐色、外面は淡褐色を呈する。

4~10はSK2から出土した土師器である。杯4、5は、口縁が外反し、端部は内側に肥厚する。内側には斜放射暗文がみられる。4は口径11.5cm、器高3.4cm、5は口径11.4cm、器高3.0cmを測る。6、7は皿である。6はやや丸い底から直線的にのびる口縁をもち、端部は丸くおさめている。内面は放射暗文を施し、外面はナデで仕上げる。口径18.5cm、器高3.6cmで淡褐色を呈する。7の口縁端部は内面を肥厚し、外側をナデで押えてい

る。底部外面にヘラ記号がある。口径23.0cm、器高3.5cmを測り淡褐色である。8は大型皿に、外反する短い脚を付けたものである。脚には面取りはしていない。内面には不定方向のキズ状の痕跡が残る。口径28.5cm、器高4.5cm、脚径は5.5cmで、淡赤褐色を呈する。椀9は、口縁端部を内側に肥厚し、内面に斜放射暗文、外面はヘラミガキを施している。口径15.0cm、器高5.6cmで暗褐色である。10はいわゆる鉄鉢型の鉢である。平底に近い底部に内湾する口縁部を有し、端部は内傾する面となる。外面は粗いハケ調整、内面はナデ仕上げる。口径20.0cm、最大径21.5cm、器高12.0cmで、淡褐色を呈する。

11～23はSK 2から出土した須恵器である。蓋11、13はやや平らな頂部から緩やかに口縁部に到り、中央にツマミがつく。11は口径17.5cm、器高3.9cm、色調は灰白色、12は口径15.5cm、器高3.4cm、暗灰色を呈する。蓋12は内面にかえりを有し、頂部にはヘラケズリを施しており、他の2点よりもやや古いものである。口径16.0cm、器高2.9cm色調は暗灰色である。14～17は杯である。平らな底部と斜め上方にのびる口縁を有するもので、端部は丸くおさめている。14は口径12.0cm、器高3.7cmで底部は未調整である。15は変形して梢円となる。口径11.5cm、器高4.3cm、を測る。16は口径12.0cm、器高3.7cm、17は口径12.5cm、器高4.0cmどちらも回転ナデで仕上げている。色調は4点とも青灰色である。

18～23は高台のつく杯である。18は小型の杯で、外反する口縁端部は薄く仕上げている。口径9.3cm、器高3.8cm、青灰色を呈する。19は高台がやや外側にひらき端部は下方に面をなす。口径14.0cm、器高3.9cmで青灰色を呈する。20、21は、底部から体部に緩やかに移行し、口縁部はやや外反する器形で、高台は小さく直立し、内傾した端部をもつ。20の口径は15.2cm、器高5.0cmで、内面は淡灰色、外面は黒灰色を呈する。21は口径16.8cm、器高4.7cm、色調は暗青灰色である。22は、高台かいの字状にひらき、端部は内傾している。口径16.7cm、器高4.8cm、暗青灰色を呈する。23の高台は断面台形で大きく、下方に面をなす。口径17.5cm、器高4.1cm、色調は暗灰色である。

24～27もSK 2からの出土である。24は土師器の小型の甕で、外面はハケ調整、内面はケズリの後、ナデで仕上げている。外面には煤が付着している。25も土師器の甕で、外面は粗いハケ調整、内面はナデで仕上げている。26はカマドの底の部分である。27は甕の把手である。体部外面はハケ調整、内面はナデで仕上げる。

28～31はSD 1から出土した。28は、須恵器甕の口縁部で、全体に自然釉がかかる。外反する口縁は端部で折り曲げて肥厚している。外面には斜線文の文様帯がある。黒灰色を呈する。29、30は須恵器の杯で、短いやや内傾した口縁をもつものである。2点とも淡灰色である。甕31は、やや偏平な体部の中央に櫛描列点文様帯をもつもので、その直下まで

ヘラケズリがおよんでいる。灰青色である。

32はSH5から出土した。長く上方に立ち上がる口縁をもつ須恵器杯で、ヘラケズリは体部全体に施している。暗赤褐色を呈する。

33はB-1区の包含層から出土した重圓文軒丸瓦である。芥川廃寺で同様の瓦が多数出土している。瓦当面には、離れ砂がみられる。黒灰色を呈する。

34~36は土壤から出土した石器である。34は尖頭器で下半部を欠損する。現存長8.6cm、最大幅2.8cm、厚さ0.8cm、重さ24.1gを測る。縄文時代に属する。35は国府型ナイフ型石器で、基部調整を施すものである。長さ6.1cm、最大幅2.0cm、厚さ0.8cm、重さ11.85gである。旧石器時代に属する。36は平基式の三角鎌である。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.125gを測る。縄文時代に属する。

37はA区中央の遺構ベースである黄褐色粘土から出土した、尖頭器である。先端部を一部欠失する。長さ5.0cm、最大幅3.2cm、厚さ0.9cm、重さ13.2gである。36~37の材質はいずれもサヌカイトだが、36のみは四国金山産のものを使用していると思われる。

38はSH5から出土した。底部が湾曲した湾型滓とよばれる鐵滓で、鍛冶に伴うものとみられる。長さ11.3cm、幅7.0cm、厚さ2.2cm、重さ192.0g、色調は外面が暗黄褐色、内部は暗灰色を呈する。

小 結(図8、9)

今回検出した遺構は、奈良時代以前と奈良・平安時代に大別できる。前者のうち、弥生時代についてはSK1のみの検出で不明な点が多いが、古墳時代については、竪穴式住居7棟、溝1条を確認し、古墳時代集落の広がりが明らかになり、またSH7以南は遺構の希薄な地区となっているため、集落の南限ととらえることができる。SD1は現在のところ、その性格は不明である。集落の廃絶後に掘削されており、むしろ郡衙成立直前の遺構としてとらえた方がよいかもしれない。SD1はさらに南に延びているとみられるので、全貌が明らかになった時点で検討したい。

奈良・平安時代については、掘立柱建物、柵列などがあり、この地域では掘立柱建物40棟、柵列6条を検出したことになる。これらについて、前回までの調査成果を踏まえて検討してみる。

40棟の掘立柱建物の建物方位をみると、磁北に対し西に大きく傾く一群と、東にやや振れる一群がある。これらは、嶋上郡衙跡の建物方位の年代観によって、前者は7世紀後半、後者は8世紀後半の年代が与えられている。以下時代ごとに述べていく。なお、SB20・21・22についてはこれまでの年代観があてはまらず、またその方位がSD1と何らかの関

係があるとみとめられるので、今後の課題とし、今回はこれらを除いて考える。

7世紀後半の遺構（SB 8～10, 13～15, 17, 19, 26, ～30, 33～38, SA 5, 6）

主軸の方位が磁北に対し10～32度西に傾く掘立柱建物19棟、柵列2条がこれに該当する。一部重複するものがあり、全てが同時存在していたわけではない。一見、ランダムのよう見える配置も、軒を接して並ぶSB 13・14、ほぼ同規模のSB 26・28・29、東側柱筋をそろえるSB 36・37などが整然とならんでいる点、そしてSB 33・34とSA 5が平行に並んでいる点をみると、この時期の建物は無分別に建てられたのではなく、なんらかの規制のもとに建てられたとみるべきである。また一部自然流路の堆積土の上に位置するものもみられるが、この自然流路が遺跡の西限になっていることも指摘できる。

8世紀後半の遺構（SB 1～7, 11, 12, 16, 18, 23～25, 31, 32, 39, 40, SE 1, SA 1～4）

この時期に該当する掘立柱建物18棟、柵列4条は、主軸の方位が磁北に対し5度程東に振れるもの（SB 1, 2, 3, 16, 18, 23, 24, 25, 31, 32, SA 1, 2, 4）、同様に東への振れが9度程度のもの（建物4, 5, 6, 7, 11, SA 3）に大別できる。こうした方位は新期郡庁院の方向性とほぼ同じである。

掘立柱建物の相互の関係をみていくと、ある掘立柱建物のいずれかの柱筋は他の掘立柱建物の柱筋あるいは中軸線に対応しており、柵にもあてはまる。以下具体的にそれらをあげていく。

- a. SB 1とSB 2の東側柱筋
- b. SB 1の北側柱筋とSB 3の南側柱筋、SA 1、さらにSB 16の北側柱筋
- c. SB 2の南側柱筋とSB 25の北側柱筋
- d. SB 3とSB 24の東側柱筋
- e. SB 5とSB 6の西側柱筋
- f. SB 5とSB 11の南側柱筋
- g. SB 6とSB 7の南側柱筋
- h. SB 7の西から2列目の柱筋とSA 4
- i. SB 11の中軸線とSB 23の西側柱筋
- j. SB 31の北から4列目の柱筋とSB 23の北側柱筋、およびSA 3の北端
- k. SB 31の中軸線とSB 32の東側柱筋

このように、各掘立柱建物および柵列は相互に関連し合って配置されていることがわかる。これらを俯瞰的にとらえると、調査区中央西寄りでは倉庫とみられる縦柱構造のSB 1・2・3・24が一定の空間を保ちつつ一つのまとまりを形成し、これを中心として南に

S B25、北と東にはS B 5・6・7・11・23・31・32、そしてこの周辺で唯一の井戸S E 1をともなって配置されている。このうち、S B25は側柱建物だがS B24と並列していることから収蔵施設の屋であると考えられ、その他の側柱建物についても、東西棟のS B11以外の南北棟は屋とすることが可能であろう。こうしてみると計画的に整然と配置された大がかりな倉庫群としてとらえることができる。

つぎに、この倉庫群の範囲についてみると、敷地の西側および南側を自然流路が北西から南東に流れしておりこれ以上の広がりはみられない。また、SA 3より東は無遺構地帯となっており、これより東の地域とは性格を異にしていたことが容易に理解できる。北側については一連の建物が連なるものとみられ、南北は確定できないが、建物の配置などから

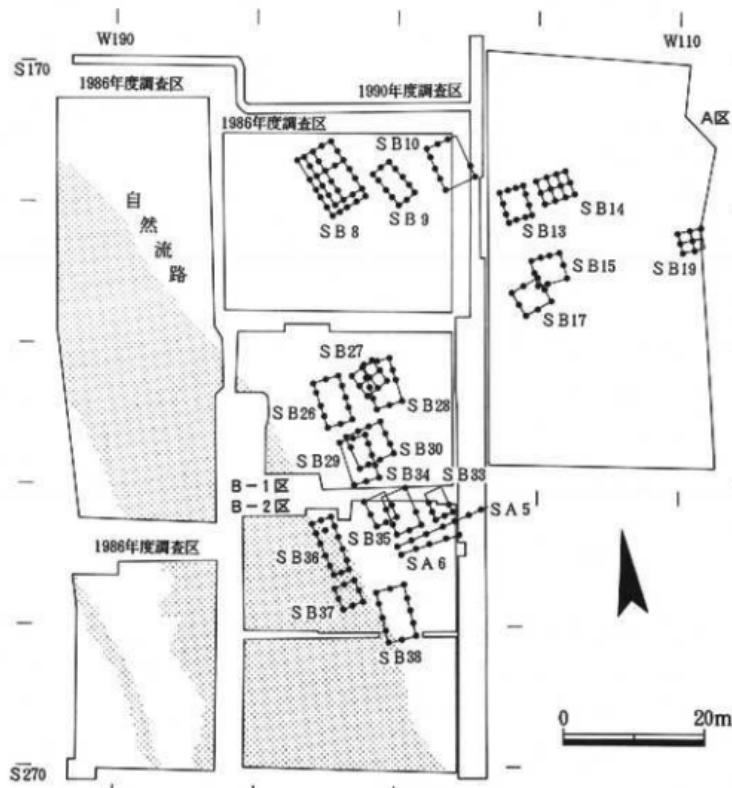


図8. 検出遺構概念図（7世紀後半）

判断し、この倉庫群は東西約60mの範囲でひとつのまとまりを形成していたと考えられる。

また、建物の桁行方向に注目すると、SB11、SB12以外はすべて南北方向にある。つまり建物の正面を東西方向のどちらかに意識した構造となっている。このことは、SB5やSB31などの大型のものが南北棟であることからもうかがえる。このため、西側自然流路が存在しているので正面ではなく、これらは東向きの倉庫群と想定することができる。さらにこうした建物群によって形成された広場とも言うべき空間は南にひらいており、南方を強く施行した構造となっている。倉庫群の北東側には郡衙の中核である郡庁院が位置し、南側は官道である山陽道が走っている。この倉庫群はこれらを意識して造られたことは言うまでもない。

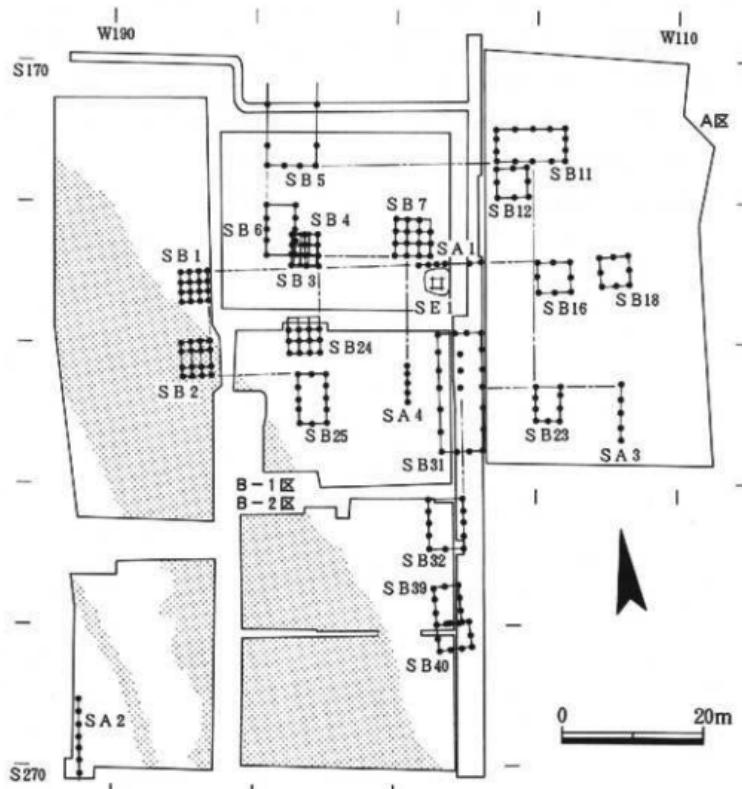


図9. 検出遺構概念図（8世紀後半）

一方、郡庁院から南に延びて山陽道に連なる石敷道路の東西には、館舎域が想定されているが、前述のごとく無遺構地帯によって倉庫群とこれらとは厳然と区別されている。つまり、今回検出した倉庫群は、館舎域とははっきり区画された郡衙域西南部の地域に位置していたことになる。

以上のことから、この倉庫群は、郡衙域の西南部に位置し、8世紀後半の郡衙再整備の際に、郡庁院と同様の方向性のもとに、山陽道との関係を考慮して計画的に設定されたもので、一定の区画内に整然と配置された大がかりな倉庫群と考えられ、「正倉」にふさわしいものといえる。

今回の調査により、「高津」地区でおこなった総調査面積は7000m²を超え、島上郡衙跡ではかつて無い、広い空間の全貌が明らかとなった。郡衙関連のその成果としては、7世紀後半の掘立柱建物にも、わずかながら規格性がうかがわれたこと、そして、8世紀後半の整然と配置された「正倉」の存在が確認されたことがあげられる。前者は古期郡庁院に関わる重要な知見であり、今後に課題をのこしているといえる。後者は非常に重要な成果であり、郡衙の構造解明に一步近づいたといえる。今後、周辺の調査では、このような結果を充分補足し得る調査結果が期待できるであろう。

(高橋)

II 郡家本町遺跡

5. 郡家本町遺跡の調査

高槻市郡家本町1000-11番地にあたり、小字名は東上野と称する。現状は畠地である。このたび個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部東端に位置し、北側を東流する芥川より南側約100mの地点にあたる。この付近一帯は、西側から延びてきた南平台丘陵が幅の狭い台地状を呈するところで、南・東側の視界は非常に良い。

調査は届出地の中央部に東西7m×南北13.5mのトレンチを設け、重機を使用して耕作土・床土を除去し、その後の人力で地山面まで掘り下げておこなった。層序は耕土(0.2m)、床土(0.1m)、暗褐色土層(0.1~0.15

m)〔遺物包含層〕、黄褐色土～礫土層〔地山〕である。地山面の標高は、北端で30.5m、南端で30.3mを測り、北側から南側にゆるやかに傾斜する地形となっている。

遺構(図版第35・36、図11)

今回検出した遺構は、調査面積が狭小であったにもかかわらず、弥生時代後期後半の竪穴式住居1基・溝1条と、歴史時代の柱穴多数がある。

竪穴式住居は、調査区中央部で検出した方形のプランを有するもので、西・東の一部は調査区域外にあるが、一辺約6mを測る中規模程度のものと推定される。この住居跡は2回程の建て替えがおこなわれており、東部は古い住居跡と重複するためか、床面に比高差0.1mの段ができる。住居跡の南北辺は磁北に対し30度程西側に振っている。壁面の高さは、北側で0.1mを測り、周溝は0.2~0.25m、深さ0.05mである。住居跡の埋土は暗褐色土層で、中央部付近から廃絶後に投棄された弥生時代後期の土器片が多数出土した。

溝1は、調査区の北西部で検出した住居跡より古い南北溝で、幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が暗褐色土層、下層が暗茶褐色土層で、弥生時代後期の土器片が若干出土した。

遺物(図版第37)

弥生時代の遺物は、住居跡・溝・柱穴等から出土した土器が多数ある。いずれも破損し



図10. 郡家本町遺跡調査位置図

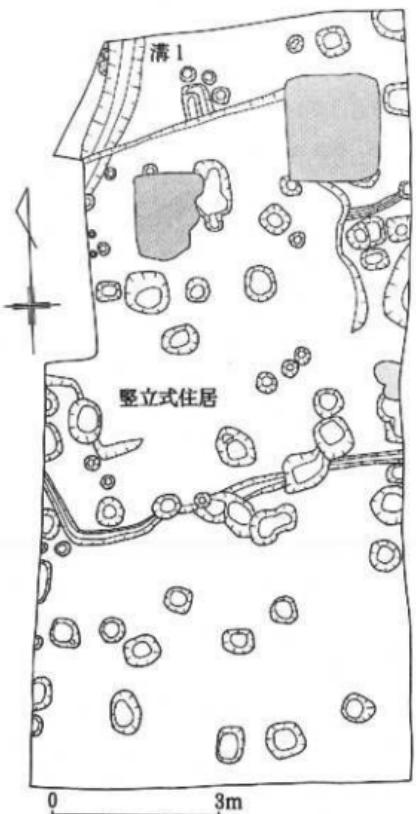


図11. 郡家本町遺跡 平面図

稜線上に刻み目がつけられている。8はラッパ状にひらく高坏の脚部である。9・10は中形壺の口縁部で、体部にタタキ目を残し、一部にススの付着が認められる。11～13は壺の底部で、内面にクモの巣状痕が残り、11の底裏は叩き板で叩いている。14は体部にタタキ目を残す大型の鉢で、外反する口縁部に片口がつくり出されている。

その他、遺物包含層から古墳時代後期の須恵器の杯・鉢片が出土しているが、いずれも細片のものばかりで完形品に復元することができなかった。

小 結

今日の調査は、個人の住宅建設に伴う小規模なものであったが、弥生時代後期の堅穴式

て破棄された細片のものばかりで、完形に復元できたものはない。器種としては、壺・甕・高坏・鉢・有孔鉢・器台・蓋等があり、時期としては弥生時代後期後半のものばかりである。1～4は壺の口縁部である。1はこの時期の特徴的な二重口縁壺で、大きな円形浮文が貼り付けている。2は円弧に描く波状文の上に、3は凹線文の上に円形浮文を貼り付けて加飾している。4は頸部から短く外反する小型の壺の口縁部で、装飾は施されていない。5はヘラ磨きした肩部に櫛目文と刺突列点文をほどこし加飾する小型の壺である。6はつまみ部が小さく高くつくられた甕蓋である。7は大きく外反する高杯の杯部で、

住居跡・溝など貴重な遺構を検出した。特に、弥生時代の竪穴式住居跡は、本遺跡で最初の検出例であり、遺跡の立地や包含層の分布状態からさらに多くの住居群が、この付近一帯に広がっていることが予測される。弥生時代の住居群については、すぐ南側に広がる鳴上郡衙跡の集落と指呼の距離にあり、本遺跡の集落が単独で構成していたのか、大いに問題になるところである。

昨年度の調査では、中央部付近で平安時代の大規模で長大な掘立柱建物跡群が検出され、郡衙や芥川廃寺を一望にできる立地にあることから、公共的建物の存在が考えられており、今後の周辺地域での調査が大いに期待される。 (大船)

III 群家今城遺跡

6. 郡家今城遺跡（92-1）の調査

郡家新町65番地にあたり、小字名は茶屋之前、現状は田である。このたび個人住宅の建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は府立三島高校北側である。この地域は西国街道に沿う水田地帯であったが近年宅地開発が活発になり、それに先立つ発掘調査が継続して実施されている。これまでに、奈良時代から平安時代にかけての150棟を越える建物や井戸が検出され、柵や溝で区画された屋敷地を確認することができる。このような遺構は嶋上郡衙ときわめて密接な関係にあるものとみられ、その衰退時期も嶋上郡衙と同時期とみられている。

当調査地付近では、西側に隣接する地域で1973年に発掘調査が実施され、19基の土壙墓が調査地東側で検出されている（『郡家今城遺跡』『昭和47・48年度高槻市文化財年報』1974年）。このため、土壙墓群の広がりが確認できるものとみられた。調査は重機で表土を除去するとすぐに遺構検出面となり、以下は人力で掘削作業を実施した。なお、個人住宅建設予定地南側の倉庫建設に先立つ発掘調査の成果をあわせて報告する。

遺構・遺物（図版第38～40・62）

調査地は南北に長いため、南北約45m・東西約18mの調査区となった。この付近の水田は大正時代の耕地整理や、昭和時代に入ってからも国道建設工事の盛土として土が運ばれています。かなり削平されていることが土層の堆積からもしらうことができる。図13の土壙墓28断面で調査区西北付近をみると、約0.2mの耕土を除去するとすぐに黄灰色または黄白色の砂質土となる。この土層は郡家今城遺跡全体の地山面を形成している。調査区北部では耕土下の床土もみられず、すぐに遺構が検出される。調査区中央部から南側にかけては0.1m程度の床土がみられ遺構検出面は緩やかに南側に下降している。調査区北部で標高17.4～17.5m、調査区南側では17.3mを測り、ほぼ平坦な遺構検出面である。

検出された遺構は多數の土壙である。不定形な掘り方を呈するものが多く、出土土器は

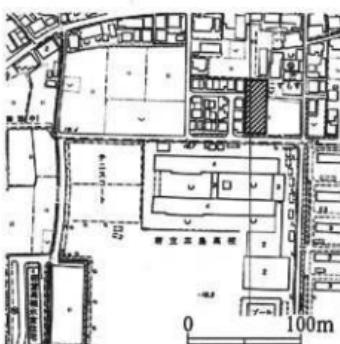


図12. 郡家今城遺跡（92-1）調査位置図

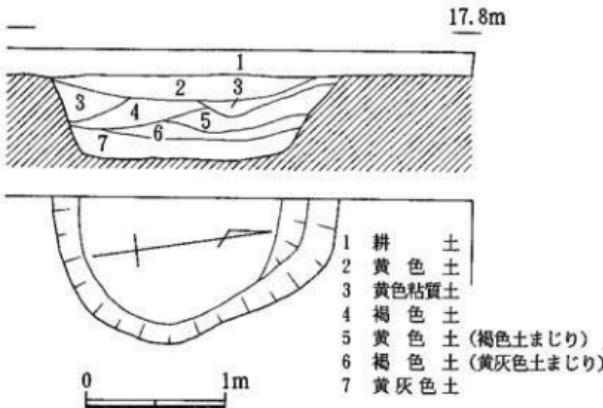


図13. 土塚墓28平面図・断面図

極めて少量である。このため、粘土探掘壙または風倒木とも推定された。しかし、完形の土器が出土するものや、遺構のみられない空間地のあること、また土塚墓28の断面などをみると一時期に埋めもどされているようである。さらに、遺跡北方にある孤塚古墳群のあり方も考慮し、ここでは土塚墓の群集したものであると報告する。

土塚墓の形状は不定形であるが小判型または長方形に近いものが中心で、ほぼ円形に近いものもある。調査区中央から南側にかけて重なりあうものが多い。また調査途中の降雨によって形状や切りあい関係が不明になったものもあるが、総数106基を数えることができる。なお、木棺など内部施設をともなうものは皆無である。

法量については表3にまとめたが、図14の土塚墓2のように掘り形の一方の幅がやや広く、もう一方の幅が狭くなるものが目につく。掘り形の壁は壙底にむけてゆるやかに掘削され、底部はほぼ平坦である。規模は長さ2.5

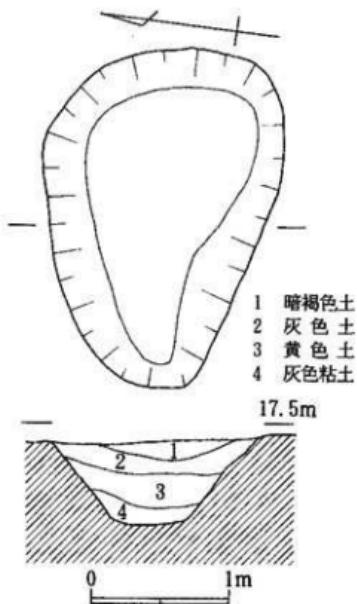


図14. 土塚墓2平面図・断面図

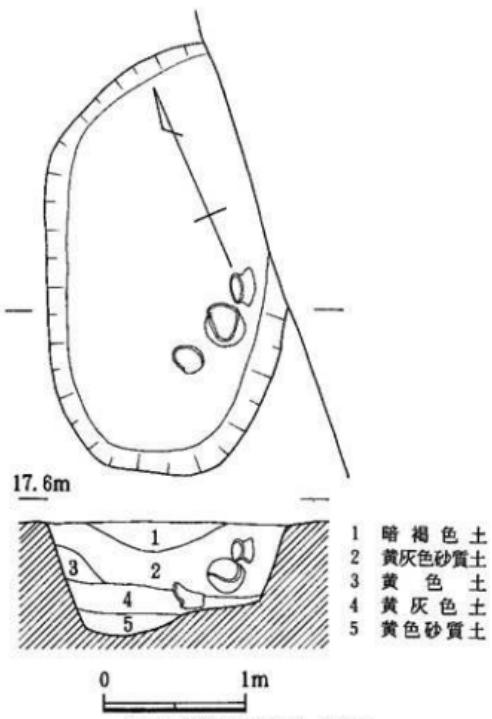


図15. 土壌墓19平面図・断面図

m、幅1.7、深さ0.6mを測る。このような形状でほぼ同じ法量の土壌墓は約30基を数える。

土壌墓19(図15)は土壌墓2などを一まわり大きくした形状で、側壁は鋭角的に掘削され、埋土の途中から完形の庄内式土器1点と数点の破片が出土している。調査区の東端で検出されたため一部が壁にかかるが、長さ3m、幅1.7m、深さ0.7mを測る。類似する規模の土壌墓は27や52・56のように数基を数える。残りは長さ2m未満であり、そのうち長さ1.5m未満のものも25基ほどある。形状はいずれも不定形で、11・14のようにほぼ円形のものもある。

土壌墓の配置状況で目につくのは調査区北部の土壌墓19・20や土壌墓23・26、土壌墓36などに囲まれた直径約10mの範囲には土壌墓は検出されず空間地となっている。同様に調査区中央部の東側と調査区南西部にも空間地がみられる。そして北部の空間地南側と中央部東側の空間地の南側に土壌墓が集中し、重なりあって掘削されるものも多数存在する。このような現象は重なりあう土壌墓56~60や81・82などから、空間地を中心に同心円状に土壌墓が構築され、それぞれのグループの外辺部分の土壌墓が重なっているものと理解できる。

前述の耕地整理などによって遺物包含層が削平されたことにより出土土器は極めて少ない。この傾向はこれまでの周辺における調査でも指摘できることであるが、今回は整理用コンテナに2~3箱という状況で、その内容も土師器や須恵器の小破片である。このため、土壌墓19から出土した完形品についてのみ報告する。

表3 郡家今城遺跡土墳墓一覧表

(単位:m)

番号	長さ	幅	深さ	番号	長さ	幅	深さ
1	1.0	0.8	0.3	54	1.4	0.8	0.4
2	2.5	1.7	0.6	55	2.3	1.8	0.5
3	1.3	0.9	0.2	56	3.2	2.5	0.4
4	1.9	1.0	0.2	57	2.2	-	0.4
5	1.9	1.1	0.6	58	-	-	0.3
6	1.2	1.1	0.5	59	1.9	1.5	0.3
7	2.0	1.4	0.4	60	3.3	1.7	0.5
8	1.3	1.0	0.4	61	1.1	0.7	0.1
9	1.6	1.1	0.4	62	2.8	2.5	0.4
10	1.4	1.2	0.5	63	2.5	1.0	0.4
11	1.1	1.1	0.6	64	-	1.5	0.4
12	2.1	1.4	0.8	65	1.9	1.5	-
13	1.5	1.2	0.4	66	1.4	1.2	0.3
14	1.0	0.9	0.7	67	-	1.1	0.2
15	2.0	1.6	0.3	68	2.5	-	0.3
16	1.1	0.8	0.7	69	1.7	-	0.3
17	2.0	1.7	0.6	70	1.2	0.9	0.3
18	1.2	1.1	0.6	71	1.7	1.2	0.4
19	3.0	1.7	0.7	72	1.4	-	0.4
20	-	2.3	0.7	73	1.3	0.7	0.4
21	3.0	2.0	0.7	74	2.0	1.6	0.2
22	-	1.4	0.6	75	1.2	1.0	0.3
23	2.2	1.3	0.7	76	1.1	0.9	0.3
24	-	1.0	0.6	77	1.9	1.4	0.3
25	0.8	0.6	0.4	78	1.5	1.1	0.4
26	1.9	1.2	-	79	1.4	1.1	0.4
27	3.0	1.5	0.6	80	1.4	1.3	0.4
28	2.0	-	0.6	81	2.2	1.6	0.3
29	2.6	-	0.4	82	2.6	1.5	0.2
30	1.2	1.0	0.3	83	-	1.3	0.2
31	1.5	1.5	0.7	84	0.8	0.7	0.4
32	1.6	1.3	0.4	85	-	0.6	0.3
33	1.4	1.0	0.2	86	0.9	0.9	0.4
34	2.2	1.5	0.4	87	-	1.0	0.2
35	1.8	1.5	0.4	88	1.7	1.0	0.2
36	1.4	1.2	0.4	89	1.5	1.2	-
37	0.7	0.7	0.4	90	-	-	0.4
38	1.2	0.8	0.5	91	2.7	-	0.4
39	1.3	1.1	0.3	92	2.5	-	0.3
40	-	1.0	0.3	93	2.0	1.6	0.4
41	-	1.1	0.4	94	3.5	1.1	0.3
42	1.0	1.0	0.4	95	-	-	0.3
43	2.1	1.5	0.5	96	1.7	1.4	0.4
44	1.8	1.1	0.5	97	2.5	2.0	0.6
45	1.5	1.2	0.3	98	2.0	1.9	0.4
46	1.3	1.1	0.3	99	1.8	1.3	0.4
47	2.2	1.4	0.4	100	-	1.8	0.4
48	1.2	1.2	0.2	101	2.0	1.3	0.4
49	2.0	1.5	0.3	102	-	0.8	0.4
50	2.0	1.4	0.3	103	1.8	1.0	0.3
51	1.9	1.0	0.5	104	-	-	0.4
52	4.0	1.5	0.5	105	2.1	1.8	0.3
53	1.4	1.1	0.4	106	1.6	1.1	0.5

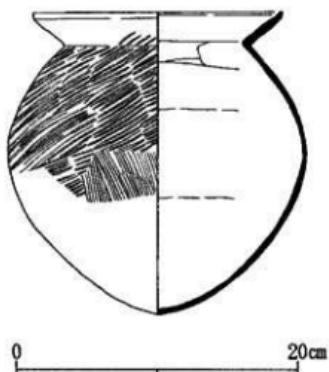


図16. 土壙墓19出土土器

土器（図16）は口径17.7cm、器高21.5cm、腹径21cmを測り、最大腹径は体部のやや上位にある。頸部は「く」の字形に屈折し、内面は鋭い稜をなす。口縁は端部外面を面取りしている。体部外面は細かいタタキ目を施し、体部下位にはタタキ目の上から縱方向のハケ目がみられる。器壁は内面のヘラ削りによって薄く仕上げられている。底部は尖り底である。このような形態や手法は典型的な庄内系壺であることを示している。現在、庄内式土器は何期かに編年されるが、米田敏幸のいう庄内式期Ⅱに相当するものである（「土師器の編年・近畿」『古墳時代の研究6』1991年）。なお、胎土は茶褐色であり生駒西麓地域からの搬入品とみられる。

小 結

106基にのぼる土壙墓群を検出したが、なお調査区の周囲に広がっていく様子は図版第62や1973年の調査（「郡家今城遺跡」『昭和47・48年度高槻市文化財年報』1974年）からも看取される。このような土壙墓群は1975年度までの狐塚古墳群の調査で検出されている（「狐塚古墳群」『昭和50年度高槻市文化財年報』1976年）。ここでは5世紀末に4基の方墳が築かれた後、約600基の土壙墓が築かれ鎌倉時代におよんでいる。その形状はいくつかに分類されているが、当調査区同様に不定形なものが多い。また、土器などを副葬するものもあるが全体の一部にしかすぎない。このため、当調査区のあり方と極めて類似するものであるが、当調査区の土壙墓群は土壙墓19出土土器からみて古墳時代初頭を中心とする時期と考えられる。

（橋本）

7. 郡家今城遺跡（92-2）の調査

高槻市今城町27-1にあたり、小字名は鳥黒と称する。現状は水田である。今回、個人住宅建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査地は、遺跡の中心部とされる府立三島高校の南西に位置し、これの西側における1973年度の調査では、奈良時代の掘立柱建物54棟、井戸18基などを検出している（「郡家今城遺跡」『高槻市文化財年報昭和47・48年度』1974年）。今回の調査でも、同様の遺構の存在が予想された。以下調査の概略を記すが、今年度は南接する地区も調査を実施しているので、一括して扱う。

遺構(図版第41~49、63 図18)

遺構は、地表下0.2mの黄灰粘質土上で検出した。標高はおよそ18.3mで、南にやや傾斜している。

検出した遺構は、奈良・平安時代の溝、掘立柱建物、柵列、井戸、土壙のほか、近代の水路、粘土採取場(アミ部分)があるが、近代のものは記述を省略する。

溝SD1は、調査区中央を東西に貫く幅5.0m、深さ0.8mの大溝である。1973年度の調査では島上郡十一条6里と7里を界する東西溝とともに、これより北200尺でも東西溝を検出しておらず、SD1は後者の東延長線上に位置する。しかしこの東西溝は調査区東端で南北溝に直交し、それ以東に延長しているかは不明であったが、SD1がこの東西溝に連なる可能性は高い。南岸は断崖状に直下に落ちるのに対し、北岸はテラス状に緩やかに傾斜し、ある地点で角度を変え急に深くなっている。この北側のテラスでは、家畜類の足跡と思われる小さな穴を無数に検出した。同様の足跡は、後述する西端の北行する部分のテラスでも検出している。東側は調査区外にのびているが、西端では北・南にそれぞれに屈曲して開き、三角州状になっている。西壁の土層観察では、溝の再掘削の状況が確認でき、本流はさらに西側にのびていることがわかる。北側は幅2.5mでおよそ10m北行し、その西側はテラス状になるが、その先端は、近代水路により破壊されている。おそらく周囲の状況からすれば、この付近で西に屈曲していたものと思われる。南側は次第に浅くなり明瞭でなくなる。溝底の標高は東端で17.5m、西端で17.9mである。8世紀後半から9世紀後半の遺物が数多く出土した。

掘立柱建物SB1は調査区中央で検出した。桁行6間(10.7m)、梁行1間(4.0m)の南北棟で、方位はN-8度-E(方位は磁北を使用、以下同じ)を示す。柱穴は一辺0.4~0.6mの方位ないし隅丸方形で、深さ0.3mを測る。

SB2は、SB1の北で重複して検出した。桁行6間(10.8m)、梁行1間(3.8m)の東西棟である。柱穴の切り合いがないので、SB1との直接の新旧関係は不明である。方位はN-11度-Eである。柱穴は一辺0.5~0.8mの隅丸方形ないし、直径0.6mの円形を呈し、深さは0.5mである。

SB3は、SB2の東で検出した。桁行3間(6.8m)、梁行2間(4.4m)の東西棟の



図17. 郡家今城遺跡(92-2)調査位置図

総柱建物である。方位はN-10度-Eである。柱穴は一辺0.5mの方形あるいは隅丸方形で、深さ0.3mを測る。

S B 4は、S B 3と重なっている。S B 3の柱穴がS B 4の柱穴を切っており、S B 4が古い。北側柱筋をS D 1によって破壊されているが、桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.0m)の南北棟に復元できる。方位はN-8度-Eである。柱穴は一辺0.5mの円形ないし一辺0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.3mである。

S B 5は調査区の南部東壁際でその一部の2間(3.6m)を検出し、大半は調査区外にのびている。建物の方向、方位の詳細は不明である。

欄列S A 1は、調査区南部で検出した東西欄である。4間(10m)を確認しており、柱間寸法は均等でない。方位はN-11度-Eである。

S A 2は、S A 1のすぐ北に並列している5間(14.4m)の欄列で柱間は1.8mとそろっている。方位はN-11度-Eである。

S A 3は、S A 2の東端から屈折して北に延び、S B 3の手前まで続く5間(14.6m)の南北欄である。柱間は2.9m等間で方位はN-11度-Eである。

S A 4は、S A 3とほぼ平行する欄列である。4間(8.4m)で、柱間は2.1m等間、方位はN-10度-Eである。

S A 5は調査区中央、北よりで検出した。作り替えのある欄列であるが、a(古)、b(新)ともに、3間(5.0m)、1.66m等間である。方位はaがN-6度-E、bがN-10度-Eである。

S A 6は、S A 5の北東で検出した。4間(7.3m)の東西欄で、柱間はややふぞろいである。方位はN-10度-Eである。縦じて欄列の柱穴は直径0.5m未満の円形で、深さ0.2mまでのものが大半である。

井戸S E 1は調査区北端で検出した、縦板横棟組の木枠をもつ井戸である。内法の一辺は1.0m、検出面からの深さ2.15mを測る。木枠は下段と、その外側に重なる上段下半部が現存する。下段は長さ2m弱、幅0.2~0.3m、厚さ0.15~0.2mの縦板を、内側の上下2段の棟で固定しているが、上段の棟は崩落したのであろう、さらに落ち込まないように丸太で支えられていた。上段は現存長が0.7mあまりで総長が不明だが、幅0.2~0.4m、厚さ0.4mと下段よりも幅広の板材を使用していたようである。このうちの一枚は後述するように扉の転用であることが明らかで、さらに井戸の構造とは無関係な枘穴がみられることから、これらはすべて建築転用材と思われる。掘形は、平面形が一辺1.5mの隅丸方形で、検出面からややすく鉢状に下り、その後直下に落ちる立面を呈する。枠内から平安

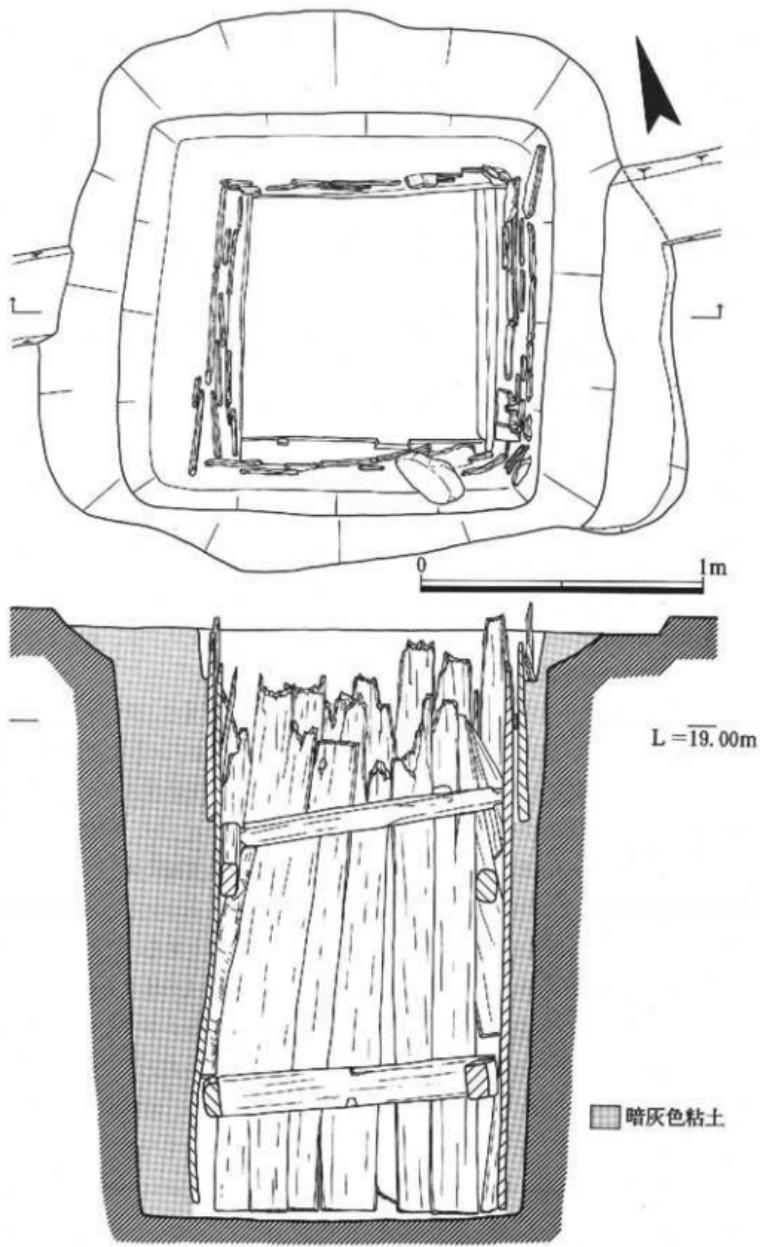


図18. SE 1 平面図・断面図

時代初頭の土器が出土した。

土壤SK1はSB3の柱穴にその一部を切られている。直径2.3m、矩形1.0mの梢円の土壤で、深さは0.1mを測る。奈良時代後半の土器が出土している。

遺物(図版第50~54)

今回の調査で出土した遺物には、奈良・平安時代の土器類、金属器、木製品、および旧石器時代の石器などがあり、その総数は、整理箱にしておよそ100箱を数える。以下その概略を記す。

1はSK1から出土した須恵器蓋である。平坦な頂部はナデて仕上げる。口径20.5cm、器高4.1cmで胎土に砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。

2~5はSD1から出土している。2は、須恵器杯で、底部から口縁部に移行するやや内側に小さめの高台がつく。高台の端部は外傾する。口径12.7cm、器高4.3cm、色調は淡青灰色である。8世紀後半に属する。3は土師器杯で、内傾して立ち上がる口縁端部は内側に肥厚する。口径13.0cm、器高3.1cmで、淡褐色を呈する。8世紀後半に属する。4は須恵器壺の口頸部である。外反する口縁は端部で屈曲して折り曲げ、外側に面をなす。口径9.8cm、現存高7.5cm色調は暗青灰色である。5は須恵器壺の体部下半である。底部には回転糸切りの痕跡が残る。底部径8.5cm、現存高12.0cmで暗灰色を呈する。4・5ともに京都府篠塚産で、9世紀後半の年代が与えられる。

6~10はSE1柱内から出土した。6は、やや深い須恵器杯である。直立する口縁はその上半でやや外反する。底部は平坦で、口縁部との変換点に高台がつく。口径16.2cm、器高5.8cm、で色調は暗青灰色である。9世紀前半に属する。7は土師器杯である。底部外面は指の押圧による成形痕がのこる。口縁部外面と内面はナデて仕上げ、口縁端部は内側に肥厚する。口径10.4cm、器高3.8cmを測り、内面と底部外面は淡褐灰色、口縁部外面は黒褐色を呈する。8も7と同様の土師器杯だが、口縁端部を丸くおさめている。口径13.0cm、器高3.8cm、色調は暗褐色である。7・8ともに8世紀後半と考えられる。土師器壺9は故意に4分割され、井戸の底で出土した。体部内面はタタキ成形後、上半はハケ、そののちナデて仕上げる。体部外面上半はタテハケ、下半はハケの後ナデを施す。口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面上半はヨコナデで、やや強くハケをあてる。胎土に、角閃石、雲母を含む。口径13.1cm、最大腹径17.0cm、器高15.2cmを測り、淡灰褐色を呈する。10も9と同様の土師器壺だが、内面に細かいハケをあて、口縁端部を内側に肥厚する点が異なる。外面には煤が付着する。口径16.0cm、最大腹径15.9cm、器高14.4cmを測り、黒褐色を呈する。

11~14はSD 1出土の綠釉陶器である。11は内底面に隠刻花文が描かれ、貼り付け高台である。緑黄色を呈する。東海系とみられ、9世紀後半に属する。12は暗黄灰色を呈し、部分的に淡緑色の釉がみられる。13も同様で、淡灰黄色を呈する。14は内面に暗灰緑色の釉がのこる。

墨書き土器15はSD 1から出土した。杯の底部外面中央のやや端よりに「東」と墨書きしており、文字の左下、右下を欠損する。現存文字長3.2cm、文字幅1.7cmである。

16・17は土馬の脚である。SD 1から出土した。円柱で中実の脚先端面はその中心を直径1cmほどくぼませている。外面にはハケがのこる。16は現存長13.0cm、直径3.5cm、17は現存長18cm、直径3.8cmで、淡赤褐色を呈する。

18はSE 1の井戸枠材で、扉の転用材である。長辺の一方に軸受に差し込む円柱状の軸を造り出している。現存長75cm、現存幅25cmを測り、おそらく不用になった扉を縦に半裁して、井戸枠として再利用したものと思われる。

19は帶金具のひとつ、鉈尾である。SD 1から出土した。全体が緑錆に被われるが、一部に鍍金がのこる。長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。

20・21は和同開珎である。20は砂が付着して保存状態がよくない。SD 1からはこの他に和同開珎の破片2点が出土している。

22~25はSE 1出土の斎串である。22は上端を圭頭状にし、下端を劍先状につくり、上端近くに側面から切込みを複数いれる型式のものである。長さ15.2cm、幅2.1cm、厚さ0.15~0.2cmで、上端にうすく墨根がのこる。23は22と同型式のものだが、下端を欠損する。現存長11.5cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmである。24は両面を丁寧に削り、先端は劍先型につくる。側面は削りこんで湾曲する部分を除き、左右とも割れて欠損する。長さ15.1cm、現存幅1.0cm、厚さ0.2~0.5cmである。25は22とはほとんど同型式だが、側面からの切り込みが1回で、全体に幅が狭い点が異なる。長さ16.2cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmを測る。

26は近代水路から出土した。全体的にローリングをうけているが、粗削調整などから尖頭器の未製品であろう、長さ7.0cm、幅3.1cm、厚さ1.7cm、重さ39.35gを測る。

27~30はSD 1から出土した。27はチャート製の円礫を利用した2次調整用の敲石である。打撃痕は一箇所だから、摩滅が著しく、使用頻度が高かったことがうかがえる。長さ5.9cm、幅5.8cm、厚さ3.9cm、重さ222.65gを測る。色調は暗緑色である。28は礫岩製の整った円礫である。使用痕が認められず、何に使用したかは不明だが、搬入された石材であることから石器であることは間違いないであろう。長径4.7cm、短径4.3cm、厚さ3.1cm、重さ87.3gで、暗灰色を呈する。29は砂岩製の円柱状を呈した敲石である。上下両端と、

各側面の計6箇所に打撃痕がみとめられるが特に両端は顕著である。裏面には下端に打撃の際にできた大きな剥離痕跡がある。一部に火熱をうけた形跡がある。長さ10.5cm、上端径3.0cm、下端径3.2cm、最大径5.3cm、重さ411.7gで、暗灰色を呈する。30も敲石の一部であり、下端を欠損する。砂岩製で、全体に火熱をうけ赤色化し淡灰褐色を呈する。現存長10.5cm、最大径5.5cm、重さ474.90gを測る。27~30はいずれも旧石器時代に属すると考えられる。

小 結

今回検出した、遺構について、その新旧関係と年代を整理しておく。

まず、直接の切り合いが確認できるのは、SB3とSB4であり、SB4が古い。そして、SB4は北側柱筋をSD1に壊されており、やはりSB4が古い。またSB3の北側柱筋はSD1にほとんど接しており、SB3はSD1の存在を意識してつくられたことは明白である。よって、SB4が一番古く、ついでSD1が開鑿され、これと同時か、やや後にSB3が造られたと考えられる。

一方、SB1とSB2は直接の切り合いがないが、その方位をみると、SB1はN-8度-EでSB4と一致し、SB2はN-11度-EでSB3とほぼ等しい。つまりSB1はSB4と同時期で、SB2とSB3の時期差はほとんど無いとかんがえられる。

さて、柵列についてもその方位をみると、SA1・SA2・SA3はSB2と、SA4・SA5a・SA6はSB3と一致し、同時期とみられる。

これらを整理すると、SB1・SB4→SD1の開鑿→SB2・SB3・SA1・SA2・SA3・SA4・SA5a・SA6の変遷がうかがえる。そして、建物方位の年代観からSB1・SB4は8世紀後半、SB2・SB3は9世紀初頭の年代が与えられる。SD1の出土遺物は8世紀後半をさかのぼらないことが明らかであり、このことからもこの年代観は支持されよう。

なお、SE1については、掘削が8世紀後半、廃絶が9世紀前半と年代は明らかであるが、その位置関係からどの建物に付属するかは不明である。おそらく調査区北側にこれに伴う建物が存在すると思われる。

つぎに、これらの建物配置をみると、SB1・SB4はいわゆる雁行型であり、SB2とSB3は並列型に移行している。ともに東西棟となり、北側柱筋はSD1と平行でSD1との密接な関係がうかがわれる。SD1は流路としての機能以上に、宅地を区切る性格を担っていることは明らかで、建物の変遷は宅地の改変に伴うものと考えることができる。一方、建物の規模は、建て替えの前後であまり変化していない反面、新たに柵列を配して

以前と同様の施設をさらに充実させたことが想定できる。ところで、これらの建物群に伴う井戸がないこと、SB1・SB2については、梁行が1間で柱穴もあまり大きくはないことが、この建物群の特徴であり、理解に苦しむ点である。あるいは、ふつうの人間が暮らす建物ではなかったかも知れない。ここで想起されるのはSD1テラスに残された家畜類の足跡であり、これらの建物の性格として、厩等の施設を想定しておきたい。

今回の調査では、一旦配置された建物を配し、溝によって区切るという宅地の改変がおこなわれたことが明らかとなった。この西側では、1973年度の調査により、東西溝で区切られた宅地に建物群が展開する奈良時代集落が発掘されており、こうした周囲の調査成果を巨視的にとらえ、郡家今城遺跡を再構成していくことが、今後の課題である。（高橋）

IV 宮田遺跡

8. 宮田遺跡の調査

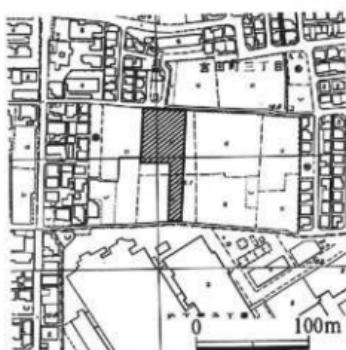


図19. 宮田遺跡調査位置図

宮田町3丁目94-1, 95にあたり、小字名は鎌木、現状は田である。このたび個人住宅の建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地周辺はかつて宮田神社南側に広がる水田地帯であったが、近年の宅地開発により水田は当調査地付近に残るだけである。周辺における宅地開発では中世の屋敷跡を中心とする遺構・遺物が検出されており中世考古学研究にとって重要な資料を提供している。とくに、

当調査地東方における1971年の調査では溝や柵で区画された屋敷跡が検出されている。また、1977年の当調査地西北部の調査では総柱建物を中心とした屋敷跡が検出されている。これらの屋敷跡は東西方向に並ぶもので中世集落を解明するうえできわめて重要な資料となっている。このため、当調査地でも中世集落の一部が検出されるものと予想された。調査の結果中世の井戸や溝などを検出することができた。なお、個人住宅予定地南側で計画された共同住宅建設に先立つ調査結果もあわせて報告するが、その位置は図版64に示したように南北方向の2本のトレンチである。

遺構（図版第55～57a・64、図20・21）

調査地は南北に長い水田で、個人住宅建設予定地はその北端にあたる。調査は重機を使用して耕土を除去し、以下人力で遺構の検出作業をおこなった。約0.2mの耕土を除去するとすぐに黄灰色または黄白色の砂質粘土となり中世の遺構が検出される。遺構は溝1状、柱穴10数個、井戸1基である。

溝1は調査区西北部から東南部にかけて直線的に掘削されたもので、西北部で幅約1m、深さ0.5mを測る。現在の周辺の水田の畦畔とは著しく方向を異にし、南北方向で約60度西に偏している。

柱穴は溝1の北側で4個が一直線に並び検出された。柱間は西から2.7m、2.4m、2.4mで北側への広がりは確認できなかった。柱穴の大きさは0.2m程度であり建物にともなう柵とみられる。方向はN-81度-Wである。他の柱穴は散在し、まとめることはできな

かった。

井戸1（図20）は直径1.2mの円形井戸で、深さは1.1m、底部は東西約0.9m、南北1mである。底部のやや東よりを約0.2m掘りくぼめて曲げ物を据えている。上部の井戸枠は検出されなかったが、調査途中で埋土中に壊石がいくつかみられ本来石組みであったとみられる。埋土は上層から灰褐色土、青灰色粘土、灰色粘土、青色粘土とレンズ状に堆積している。青灰色粘土や灰色粘土から土師器皿や瓦器碗などがまとまって出土しているため、井戸廃棄後にゴミ穴として利用されたものであろう。

溝1に類似する溝が西トレンチや東トレンチで検出されている。溝2・3・4・5・6はいずれも耕土の直下で検出され、溝2・3・4・5は溝1とほぼ方向をそろえている。溝2・3は同じ場所で掘り直し、溝4につづくものとみられる。また、溝4は幅約2mで直角に交差する溝がつづいている。また溝6は切り合い関係から溝2・3より新しい時期であることがわかり、現在の畦畔とは南北方向で約25度西に偏している。これらはいずれも幅約1m、深さ0.3~0.4mを測る。

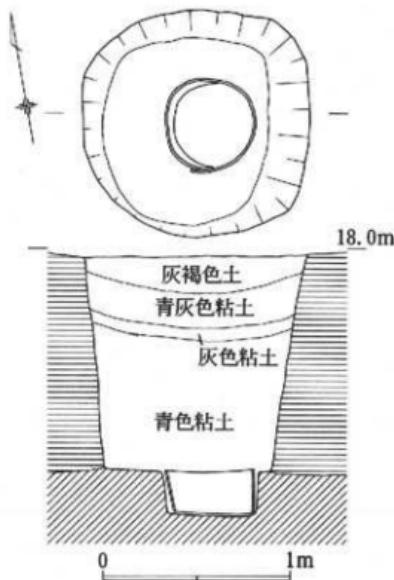


図20. 井戸1平面図・断面図

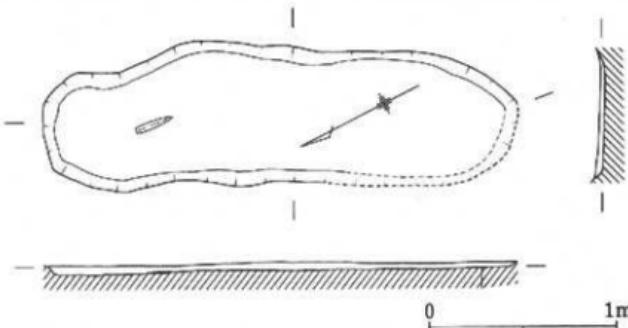


図21. 土壌基1

溝1をはじめ、いずれも溝内からの出土遺物はまったく無く、このため、いつの時期に掘削されたのか断定することができない。

西トレンチでは耕土を除去すると北端同様の黄灰色砂質土となり溝2・3・6が検出される。この黄灰色砂質土は約0.1mの厚さである。その下にさらに約0.2mの黄褐色砂質土が堆積し、この2層を除去すると黄褐色土となる。南端で深さ約0.4mの落ち込みがみられ褐色粘土が堆積していた。落ち込み底部から弥生時代後期の壺破片が出土しているが、褐色土からの出土品はなくこの付近は湿地状であったと推定される。また、西トレンチ北部では土壙墓が1基検出された(図21)。この土壙墓はほぼ長方形で長さ2.5m、幅0.7m、深さ約5cmを測る。底部の北よりから完形の磨製石剣が出土した。他に西トレンチから遺構は検出されなかった。

東トレンチからは前述の溝と小ピットが検出されている。小ピットからは近世の染付が出土しており近世以降の水田に関する野小屋か柵のようなものであろう。なお、この小ピットの検出された付近の下部にも西トレンチ同様の褐色土がみられ、湿地が東側にも広がっているようである。なお、1988年度調査の当調査区西方では現地表から約2.5m下で縄文時代後期の北白川上層式から元住吉式にかけての土器が多数出土している。このため西トレンチの中央部において、部分的に遺構検出面以下を深さ約3m掘削したが遺構・遺物はまったく検出されなかった。

遺物(図版第57b・58、図22・23)

明瞭な遺物包含層がみられないため、出土遺物はコンテナに2~3箱程度である。その多くが井戸1から出土した中世の土師器皿や瓦器類で、機械掘削作業中に少量の弥生式土器と有舌尖頭器・少量の縄文土器が出土している。

有舌尖頭器(1)は先端と舌部が欠けているが現存長4.3cm、基部で幅3.1cm、重さ6.45gを測る。サヌカイト製で両面をていねいに押圧削離している。基部の返しが発達しており最盛期の形態を呈している。高槻市では6例目であり、これまでの出土例は参考資料として後述する。

縄文時代晩期の土器(21)は口縁部上端と胴部に粘土紐の刻み目凸帯を貼り付けた深鉢で、大阪市長原遺跡出土資料を基準に長原式深鉢A1類とされるものである(『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』 大阪市文化財協会 1983年)。口縁部から2段目の凸帯にかけて内湾しながら胴部につづく。凸帯の刻み目は軽く、浅く施されている。胎土には粗い砂粒がまじり、茶褐色の色調を呈している。いわゆる生駒西麓産とされるものである。

土壙墓1から出土した磨製石剣(2)は鉄劍形の完形品で、身の中央に明瞭な鏑がみら

れる。断面は菱形で、身の中程から先端にかけて鋭い刃が磨きだされている。わずかな刃こぼれがみられるが遺存状態は極めて良好である。長さ22cm、基部で幅3.2cm、重さ84gを測る。いわゆる高島石とよばれる粘板岩製である。

井戸1から出土した土器類は瓦器碗・鉢と土師器皿・杯、須恵器鉢である。瓦器碗は初現期の形態と手法を良く示しており、それに伴う土師器皿なども同時期としてとらえられる良好な一括資料である。出土土器の破片点数をみると、土師器皿と杯で75点(55%)、瓦器碗と鉢で54点(40%)、黒色土器碗6点(4%)、須恵器鉢1点(1%)である。井戸1からは煮炊具が出土していないため、土師器と瓦器で95%を占めるが、中世初期の土器様相に一般的なものである。

土師器皿のうち完形品6点とこの時期の特徴を良く示すものを図版58と図23に示した。口径は7・8が9cmを測るだけで、10cm程度に、また器高も8がやや低いものの1.8~2cmに統一されている。口縁部は9がまっすぐにおさめるのを除き3~8は「て」字状に屈曲しているが、とくに3は屈曲が強くやや古い傾向を示している。杯は口径14.5cmを測る11と13.5cmを測る12がある。いずれも口縁部外面を一段ナデて仕上げている。器高は11が8.4cm、12が3cmを測る。皿の底部外面には、中央部から口縁部にかけて粘土の結合痕跡が認められ、粘土板結合法で製作されたことがわかる。色調はいずれも淡褐色で、精良な粘土を使用している。

瓦器碗はすべて楠葉型に属し、完形の2点と

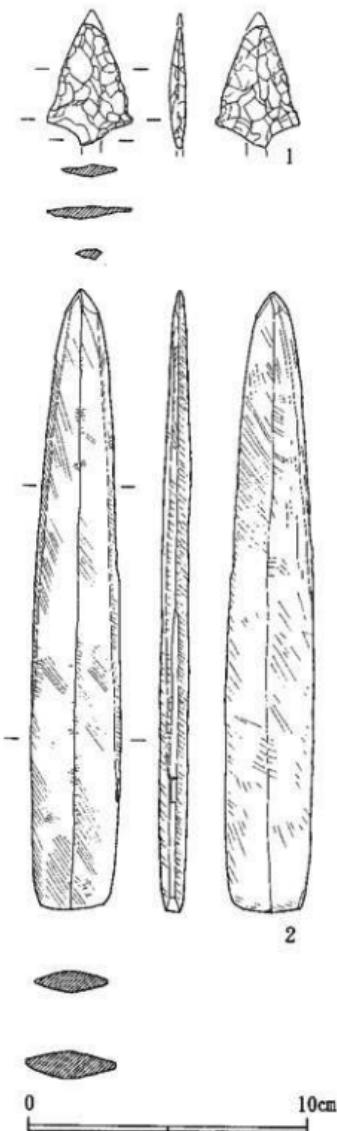


図22. 宮田遺跡出土石器

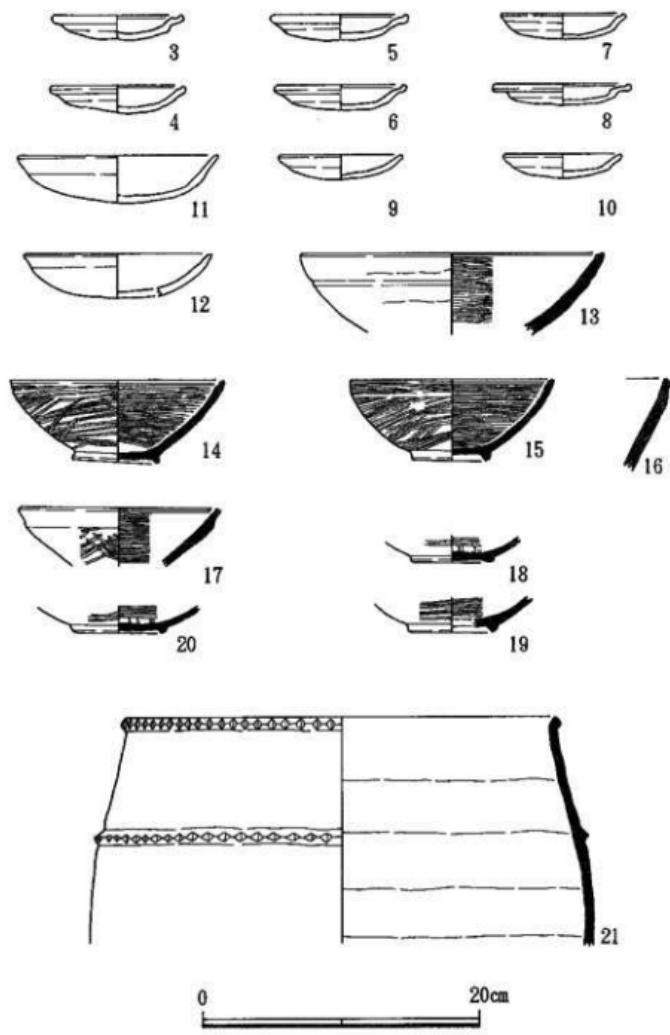


図23. 宮田遺跡出土土器

特徴的な破片をまとめた。14は口径15.4cm・器高5.9cm・底径6.4cmを測り、器高指数は38.3である。15は口径14.8cm・器高5.8cm・底径5.8cmを測り、器高指数は39.18である。いずれも器壁が厚く、内外面をていねいにヘラ磨きしたものである。外面のヘラ磨きにやや空間部がみられるが、14では外面5分割のヘラ磨き、15では外面4分割のヘラ磨きである。

内底面には平行線状のヘラ磨きが、口縁端部内側には沈線が施される。破片（17～20）はいずれもこのような特徴を良く示すものであるが、20は炭素未吸着で土師質を呈している。

13は瓦質の鉢である。口径約22cmを測り、内面は楕と同様のていねいなヘラ磨きを施しているが、外面はヘラ磨きがみられずナデで仕上げ、粘土紐の痕跡が横走し、粘土紐を巻き上げて作られたことを示している。

16は須恵器鉢の口縁部破片である。端部外面を横ナデするため屈曲が目立つ。上端部が黒色化しており、重ね焼きしたことがわかる。外面は表面が銀化したような状態であるが内面は灰色である。胎土には砂粒が目立ち、粗いが比較的硬質に焼き上がっている。なお、固化していないが少量の楠葉型黑色土器B類の楕が出土している。

井戸1以外から出土したものは柱穴のひとつから出土した土師器皿（10）で、口径8.6cm・器高1.8cmを測り、口縁部はナデのみで屈曲はしない。

小 結

当調査地で検出された遺構は弥生時代と中世に入別することができる。西トレントの南端で検出された落ち込みから弥生時代後期には当調査地南側は湿地状になっていたものとみられる。そしてその北側に土壙墓が1基営まれていたが、柱穴や住居跡の痕跡はまったく検出されず、なお周辺に未調査のまま残るものとみられる。

調査地北端で検出された井戸などは出土土器からみて11世紀後半を中心とするもので、從来からの調査で知られる中世集落の一部に含まれるものである。しかし、この部分から南では同時期の井戸や柱穴はまったくみられない。このため今回の調査では中世集落のうち東西に並ぶ建物群の南端を確認したといえる。また、溝1～5は1971年に検出された建物群や水田跡と推定される溝の方向とは異なっている。1979年に調査された北西部では条里の方向に沿う中世の溝が検出されているため、これらは中世以前にさかのぼるものとみられる。

当調査地からの出土遺物は少ないものの、有舌尖頭器や磨製石剣が出土した。とくに磨製石剣は安溝遺跡などからの出土例はあるものの完形品としては唯一のものである。1点ではあるが縄文時代晩期の長原式深鉢が出土している。宮田遺跡では1971年の調査において145点の同時期の土器が出土している。そのうち26.5%にあたる39点が生駒西麓で生産されたものである（森田克行「三島地方の縄文土器」『昭和61・62年度高槻市文化財年報』1987年）。今回出土したものも生駒西麓産とみられ、縄文時代後・晩期において人や土器の移動が活発であることを再認識させられる。

井戸1から出土した土器群は北部大阪の中世土器編年でⅠ期・11世紀後半（橋本「古代

後期・中世の土器』『中世土器研究序論』1993年)に位置付けられる良好な一括資料であるが、瓦器椀外面の4～5分割のヘラ磨きをみると瓦器椀のなかでもより古相を呈している。1971年の神社南地区の東西溝から出土した土器群はI-1期とされるが、瓦器椀の外面のヘラ磨きの省略気味のものもかなりふくまれている。しかし、井戸1・神社南地区とも黒色土器B類椀をわずかながらもふくみ、土師器皿も大差ないものとみられる。このため井戸1と神社南地区的土器群はいずれも瓦器椀初現期のものととらえられる。

井戸1から須恵器鉢の小破片が出土している。重ね焼きなどの特徴から東播磨で生産されたものとみられる。從来の東播磨における中世の須恵器編年では第I期第1段階に位置付けられる神戸市神出窯の釜ノロ5号窯がもっとも古く、京都市の平安京左京四条一坊SE8出土例がこれに相当し、「寛治5年(1091)」の墨書から11世紀後半～末の年代があたえられてきた。しかし、四条一坊SE8出土の鉢とはやや形態を異にし、年代的にも古くなる資料がしばしば存在している。そのひとつに神社南地区から出土した鉢がある。この鉢は口縁部の形態が今回報告した16に極めて類似するものである。また、奈良市平城京跡七条一坊十五坪のSE11出土資料もやや大振りであるが共通する形態をもつ。この資料は「延久参年(1071)」と墨書された井戸枠から出土している(「平城京右京七条一坊十五坪の調査」『昭和60年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告』1987年)。このため、より古い生産窯の一群が東播磨に存在するものとみられたが、1992年になって森田稔氏は神出窯の開窯を11世紀第3四半期と考える万堡池窯期とした(「東播磨」「東日本における古代・中世窯業の諸問題」1992年)。この万堡池窯の出土資料については実測図などは公表されていないが、かつて調査担当者から出土資料を拝見した時の印象は16などに類似したものである。また、森田氏は万堡池窯の年代根拠について詳しく触れていないが、今回の調査資料などは年代観を補強するものである。さらに、この時期の東播磨では瓦生産が少なく、次段階の瓦生産の急増とともに須恵器鉢も各地域に分布するようになる。このため、宮田遺跡のように初期の東播磨産須恵器出土地は特別な流通経路を有していたものかもしれない。

(橋本)

V まとめ

今年度は島上郡衙跡4件、その他周辺地域において4件の発掘調査を実施した。

今年度の調査で注目されるのは、45-L地区を中心とした地区において多数の建物を検出したことである。この地区は松下電子工業社宅南側で史跡指定地に隣接する。かつて藤沢一夫氏はこの地域の小字名である「高津（こうづ）」は、元来郡衙の遺跡としての郡津（こうづ）であり、この地区にこそ島上郡衙の郡庁院が所在すると指摘した。また、郡寺を北に、郡衙を南に配する常陸新治庵寺と新治郡衙との関係などからみても芥川庵寺（郡寺）南側に位置するこの地区に郡庁院が所在するとも指摘した（藤沢一夫「攝津国島上郡寺と郡庁院との占地—郡の総社の存在をも併せて—」『大阪文化誌』第3巻第1号 大阪文化財センター 1977年）。

ところが、1984年度の史跡指定地内の水路改修工事にともなう16-K・O地区の調査で一辺1.3m・深さ0.4mを測る大形の柱穴2個が検出された。周辺部における調査結果と併せて検討した結果、この柱穴は郡庁院を取り囲む回廊の西北部として想定できた。また、周辺の建物群の主軸方向から回廊よりも古く位置付けられる一群の建物もあり、回廊に取り囲まれたものを新期郡庁院と推定し、これより古い郡庁院は西南部に隣接するものと推定した（森田克行「島上郡衙新期郡庁院の推定復元」『島上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・9』 1985年）。

このように郡庁院の所在については川西小学校西北部にあり、郡寺とは東西方向に並ぶものととらえられるようになったが、郡寺南側地域では藤沢氏の指摘もあり、慎重に調査を実施してきた。その結果、1977年度の55-L・P地区の調査において幅約2m、深さ約1mで直線的に掘削された溝3が検出された。その後、1985年度に西方の55-I・M地区で検出された溝2は55-L・P地区の溝3の延長上にあり、調査区西端部で北方に屈折することが確認された。この溝は奈良時代後半とみられるが出土遺物はほとんど無く、しばしば溝さらえがおこなわれたものとみられる。また、一定の間隔をおいて溝底を部分的に一段深く掘削しており、類例としては鳥取県倉吉市の伯耆国庁跡第4次調査の国庁内郭Ⅱ期のSD26にみられる（『伯耆国庁発掘調査概報（第4次）』倉吉市教育委員会 1976年）。このような工法がなにを意味するかわからないが、山陽道ともほぼ同一方向を取るため郡衙西南部を画する施設の一部とみられた。

1986年度には今回の調査地西側の45-I・J・M・N地区において3間×3間の縦柱建物3棟が検出され、その方位は新期郡庁院とほぼ合致するものであった。また、縦柱建物

と同一方位をしめす建物と西に偏り新期郡庁院より古い可能性のある建物も検出された。さらに1991年度の55-C・G地区の水路改修工事に先立つ調査でも、これまでに検出されている建物の一部や柱穴が多数検出された。

今年度の調査については本文中において詳しく報告したが、これまでの調査と併せて総数40棟の建物と柵列6条を確認することができた。これらは大きく2群にわけることができる。ひとつは建物方位が磁北から10度ないし32度西に偏るものと、東へ5度または9度偏るもので、後者は8世紀後半の新期郡庁院の時期に、前者はそれより古くなる可能性があり7世紀後半とみられる。また、検出された縦柱建物は倉庫とみられ、前述のように新期郡庁院の時期に相当し、新期郡庁院の建設とあわせて当45地区周辺に倉庫群、つまり島上郡衙の正倉域が設けられたものとみられる。正倉域は他の官舎と混在することなく区別され、比較的広い敷地を占めると考えられているが、検出された倉庫もそのような指摘を反映している。一方、古く位置付けられる建物群についてはその性格を明らかにすることはできないが、古期郡庁院との関連も想定していく必要があろう。そして、先の55-I・M、55-L・P地区の溝は内側に正倉域をもつものであり、まさに郡衙外郭を区画するものとみられる。

島上郡衙周辺部の調査では24-B地区や郡家本町遺跡において弥生時代後期の堅穴式住居などを検出した。とくに、郡家本町遺跡では住居跡の確認は今回が初めてであり、郡衙北側の丘陵部に営まれた弥生時代後期の集落の実態解明に有意義な資料を提供した。また、24-B地区の住居跡をふくめて弥生時代後期でも後半期に相当するものである。さらに、45-L地区では古墳時代の堅穴式住居を8棟検出しており、弥生時代末から古墳時代にかけての集落の広がりを知ることができる。

郡家今城遺跡で検出された多数の土壙墓はわずかに出土した土器から古墳時代初期としたが、弥生時代後期にさかのぼるものも含まれている可能性がある。その土壙墓に葬られた人々の集落は当然周辺部にあるものとみられるが、島上郡衙跡もその範囲に含まれていたものとみられ、今後その関連についても注意していきたい。また、郡家今城遺跡では奈良時代の集落内部を区画する溝が検出された。この溝は島上郡の条里十一条6里と7里を界する溝の200尺北側の溝の延長とみられる。郡家今城遺跡は島上郡衙の盛衰と密接に関連することはこれまでの調査から明らかであり、律令期に営まれた集落の実態解明にとって有意義な資料である。

宮田遺跡については、今回の調査区周辺の主な調査区を図24に示した。今年度の宮田遺跡の調査(I区)では弥生時代集落の存在をしめす落ち込みや土壙墓を検出した。とくに、

調査区南端の落ち込みは広い範囲につづく可能性がある。また、縄文時代晩期の土器が検出されているが、1988年度に調査されたG区では後期の土器が多量に出土しており、縄文時代の遺構についても今後とも注意を要するものである。

中世集落の一部が検出されたが、調査区の北部に限定される。これまでの調査をみると、中世集落は今回の調査区北側の水路をはさんだ北方の地域に並んで検出されている。今回の調査区北側にはなお未調査の部分もあるが、原口正三氏は1971年（B区）と1977年（D区）・1979年（E区）に調査された地区の建物群の検討から東西約20mを一単位とする屋敷が東西に配列されていると推定した。1987年度の調査（F区）ではこのことが追認されている。また、B・F・D区北側は女是川の氾濫または弥生時代などの遺構にかぎられる。このため女是川西岸から府道までの東西約300mの間に15単位の屋敷が営まれたものとみた（原口正三「大阪府宮田遺跡再論」『小林行雄博士古稀記念文集』 1982年）。

今回検出された井戸や柵は屋敷の南端を示しているものとみられる。このため、原口氏の想定したようにB区からE区にかけて屋敷が連なっていることが確認できる。また、B区南側のC区やG区では建物などは検出されず水田とみられているが、今回の調査区の大



半も水田とみられる。なお、これまでに検出されているB・F・D・E区の屋敷跡は12世紀を中心とするものであり、今回検出した井戸は11世紀にさかのぼる。このため、15単位の屋敷がすべて同一時期に属するものかどうか、なお検討を要する。また、宮田神社の南側（A区）では11世紀代の東西溝が検出されており、古い時期には宮田神社周辺に集落の中心があった可能性もある。

宮田遺跡出土の瓦器碗などは、畿内の中世土器土器成立期を解明するうえで重要な役割を果たしてきた。今回の調査でも初期の東播系須恵器鉢資料を提供した。本文中でも述べたが、このような類例の少ない資料の出土する遺跡は自然発的に集落が成立するのではなく、開発領主などの積極的な努力があったものとみられる。その開発領主は中世土器を構成する須恵器鉢をいちはやく入手しており、日常容器などの流通を掌握していたものとみられる。

（橋本）

市内出土の有舌尖頭器

大船 孝弘

今年度の調査で宮田遺跡から有舌尖頭器が出土したが、これまで市内から出土した有舌尖頭器を集成し（表4・5）、簡単にまとめてみたい。

縄文時代の草創期から早期前半にかけて使用された有舌尖頭器は、その名が示すように三角形をした舌状の基部をもち、両面とも丁寧な斜鎬状の並行剥離で薄く仕上げた特徴的な石器である。大きさは縄文時代・弥生時代の石鎌と比べると、少し幅広で大型につくられているが、縄文時代の木葉形尖頭器に比べると小型軽量であることから、投げ槍として使用されたことが推定されている。

これまで市内から出土した有舌尖頭器は、6遺跡からサヌカイト製のもの4点、チャート製のもの2点の計6点が知られている（図25・26）。1は南平台丘陵上の弁天山古墳群を調査した際、表土中から出土した市内で最初に発見された有舌尖頭器である。先端部を欠損しているが、復元すると10cmをこえる細身の大型品で、基部が円基式になり近畿地方では類例が少ない資料である。2は辻本充彦氏によって南平台丘陵の谷間から表面採集されたもので、先端部と基部を少し欠損しているが、幅広で全体に重厚なつくりとなっている。3は辻本充彦氏によって塚原の丘陵から表面採集された中型の完形品で、基部は凹基式である。両側縁が有舌尖頭器としては珍しく左右対称になっておらず、並行剥離の後浅



図25. 有舌尖頭器分布図

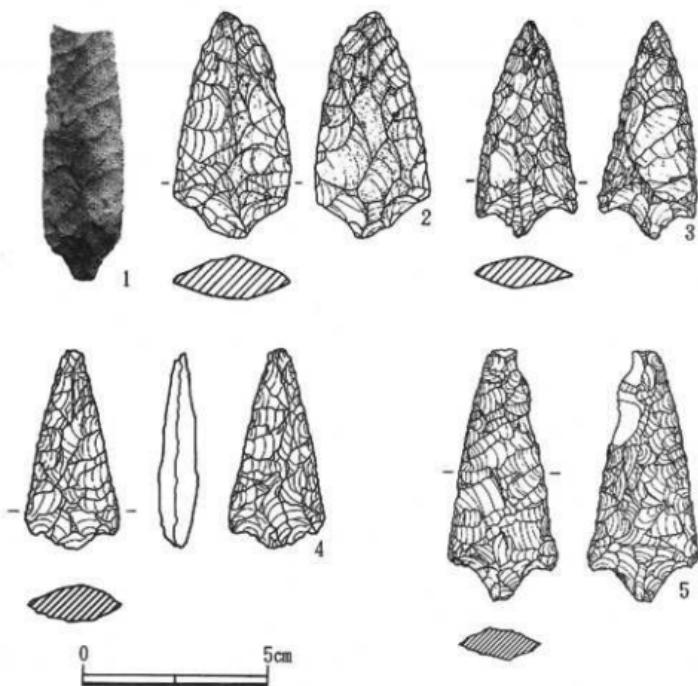


図26. 高槻市出土の有舌尖頭器

くて小さな調整剝離が両面に施されている。4は南平台丘陵上の尼ヶ谷古墳群の盛土から出土したチャート製のもので、先端部と基部を少し欠損している。並行剝離は非常に丁寧に施されており、基部は平基式で、類似資料に枚方市楠葉東遺跡のものが知られる。5は島上郡衙跡の歴史時代の遺構から出土した4と同じくチャート製のもので、先端部と基部を少し欠損している。基部は平基式で、類似資料に京都府宇治田原遺跡、桜井市朝倉遺跡などのものが知られる。出土地点についてみると、南平台の洪積丘陵上や谷間で4点、低位段丘上の平野部で2点が出土しており、市内の中でも芥川の西岸地域に集中するよう分布している（図22を参照）。こうした南平台丘陵周辺部は、大阪府下でも旧石器時代の遺跡が特に密集する地域として知られ、縄文時代においても引き続き生活に適した環境であったことが、石鎚等の狩猟具が多く出土することからもうかがい知ることができる^①。

近畿地方の有舌尖頭器については、限られた資料であるが「形態分類」・「変遷」を中心とした論考が多くの研究者によって発表されている。なかでも西口陽一氏による有舌尖頭器の集成は216点にもおよび、サヌカイト製の有舌尖頭器は大阪を中心に分布し、チャー-

ト製の有舌尖頭器は、滋賀県を中心にして岐阜県・三重県・京都府に集中して分布することなどが明らかにされ、おぼろげながら有舌尖頭器の全体像が掴めるようになってきた。特に出土点数の85%がサヌカイト製であることが知られるようになり、石材の原産地については、数少ない資料であるが皇子塚遺跡・塚原遺跡出土の有舌尖頭器が、京都大学原子炉研究所の薦科哲男によって蛍光X線分析で解析され、二上山産であることが推定されている。^②

近年の発掘調査によって、大阪府神並遺跡では神宮寺式の押型文土器に、奈良県桐山和田遺跡では隆起線文土器にともなって有舌尖頭器・尖頭器・石鐵・石錐・搔器など多く石器組成が知られるようになってきた。しかし、精巧につくられた有舌尖頭器の出現や短期間に消滅する理由等については、まだまだ明確な答えが出されていないのが現状である。こうした問題を解決するために、市内でも同時代の遺跡の探究や発掘調査の実施が一層望まれる。

表4 有舌尖頭器一覧表

番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	6.7	2.0	—	—	先端部を欠損
2	6.0	3.2	1.2	24.25	先端部と基部を欠損
3	5.8	2.7	0.8	12.7	完形品
4	5.3	2.6	1.0	11.1	先端部と基部を欠損
5	6.6	2.9	1.0	15.5	先端部と基部を欠損

長さ、幅、厚さの単位はcm、重量はgである。

表5 有舌尖頭器出土地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	石 材	点数	出土年	文献
1	弁天山B4号墳	高槻市南平台1丁目	丘陵上	サヌカイト	1	1963年	1
2	皇子塚遺跡	〃 氷室町5丁目	丘陵谷間	サヌカイト	1	1972年	2
3	塚原遺跡	〃 塚原1丁目	丘陵端部	サヌカイト	1	1973年	3
4	尼ヶ谷B7号墳	〃 南平台5丁目	丘陵端部	チャート	1	1982年	4
5	鳴上郡衙跡	〃 郡家新町	平野部	チャート	1	1986年	5
6	宮田遺跡	〃 宮田3丁目	平野部	サヌカイト	1	1992年	本書

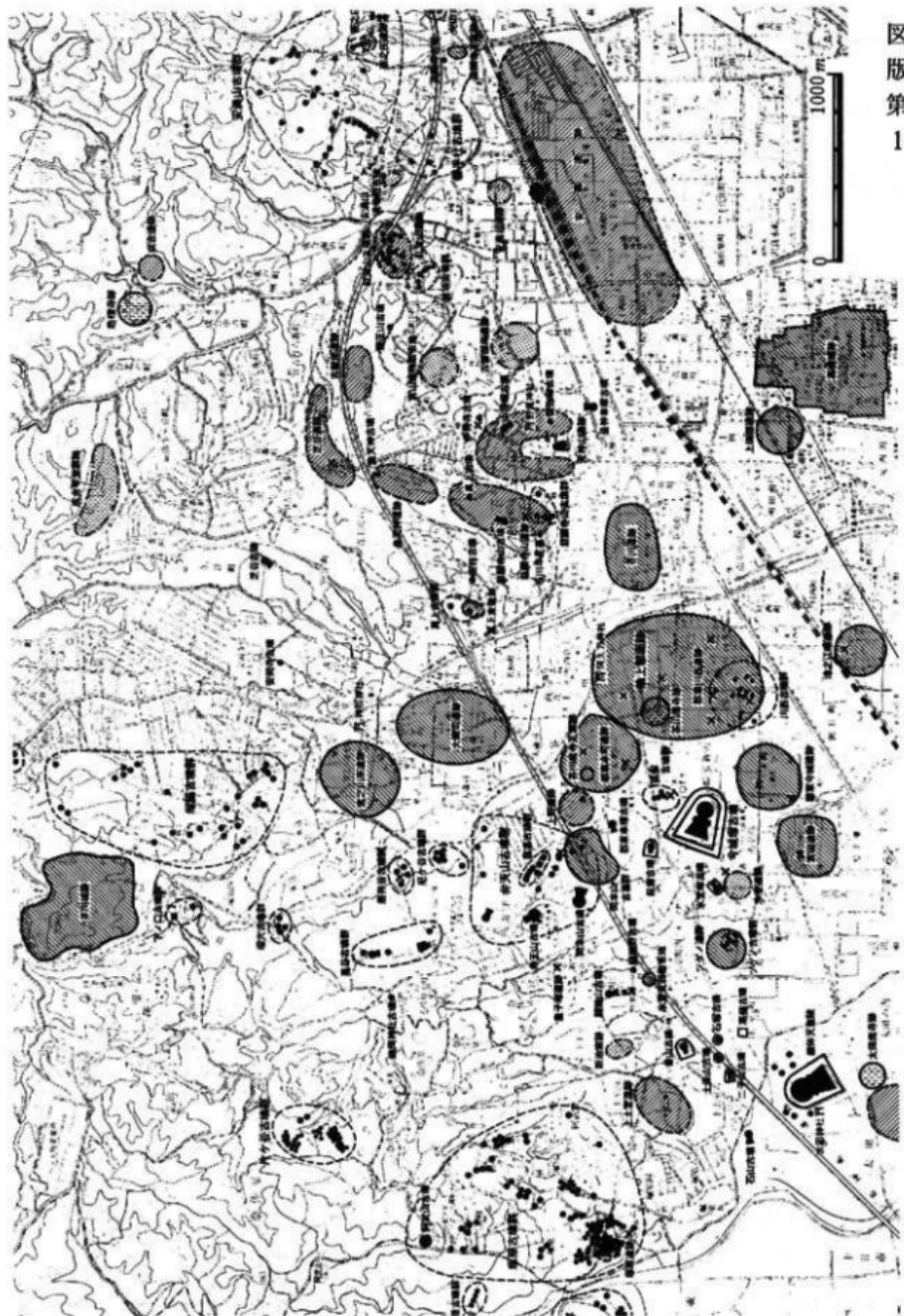
- ① 「津之江南遺跡発掘調査報告書」『高槻市文化財調査報告書』第8冊 高槻市教育委員会 1976年
- ② 西口陽一「近畿・有舌尖頭器の研究」『考古学研究』第38巻 第1号 1990年
- ③ 『神並遺跡II』東大阪市教育委員会・東大阪文化財協会 1987年

文 献 一 覧

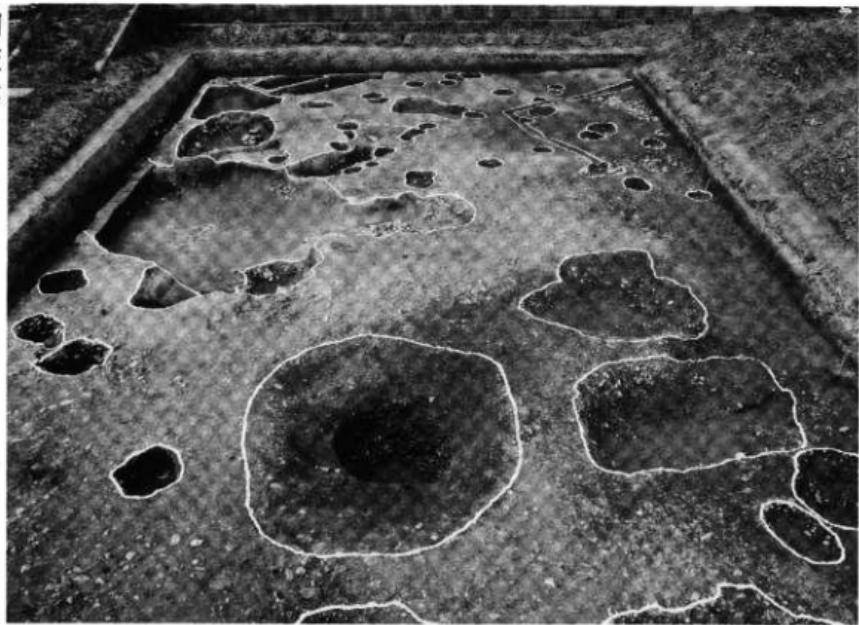
- 1 堅田 直「弁天山B4号墳」『弁天山古墳群の調査』 高槻市教育委員会 1967年
- 2 大船孝弘「三島地方の旧石器時代」『津之江南遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1976年
- 3 同 上
- 4 富成哲也「尼ヶ谷・唐井谷古墳群」『昭和56・57・58年度高槻市文化財年報』 高槻市教育委員会 1985年
- 5 鏑ヶ江一朗「45-I・J・M・N地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』 高槻市教育委員会 1987年

図 版

図版第1



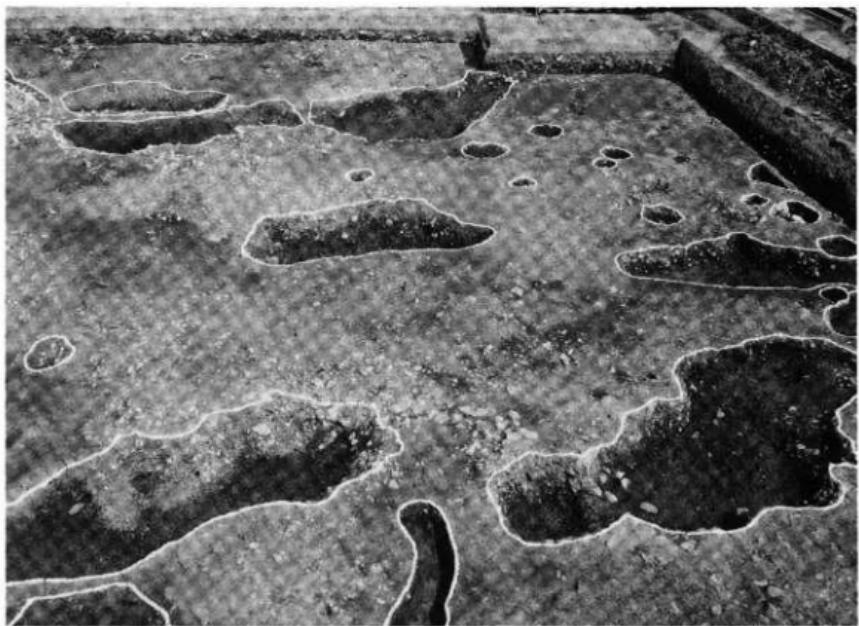
島上郡衙跡とその周辺



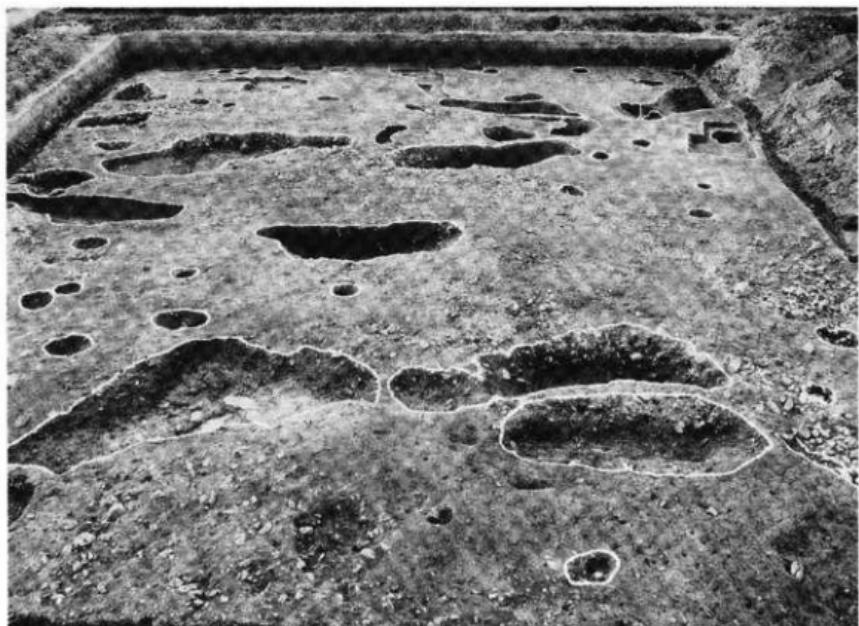
a. 24-B地区 西側調査区（南側から）



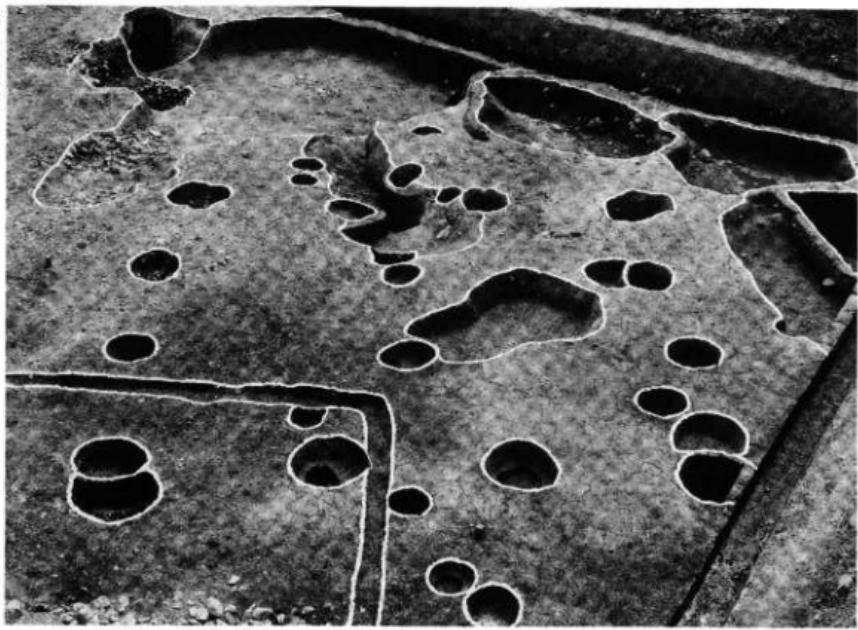
b. 24-B地区 西側調査区（北側から）



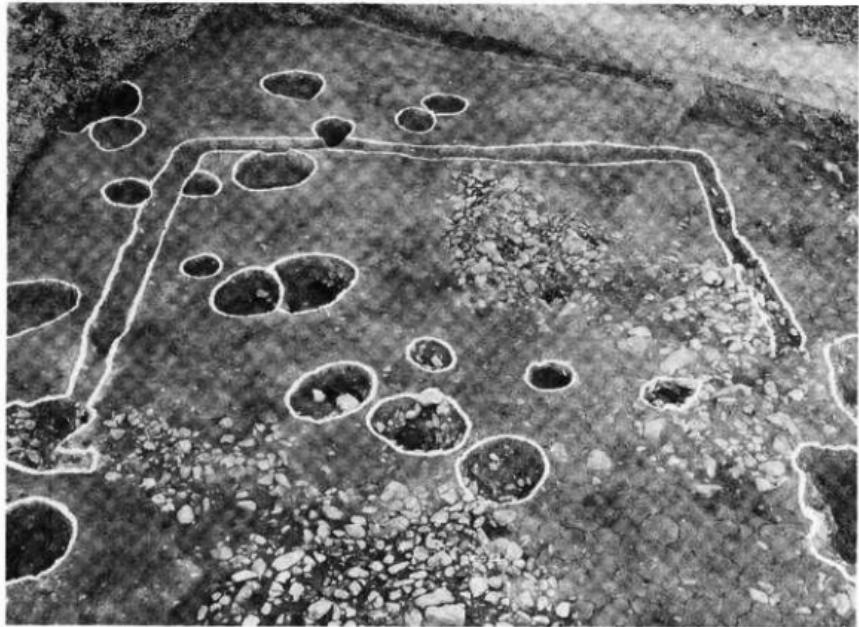
a. 24-B地区 東側調査区（南側から）



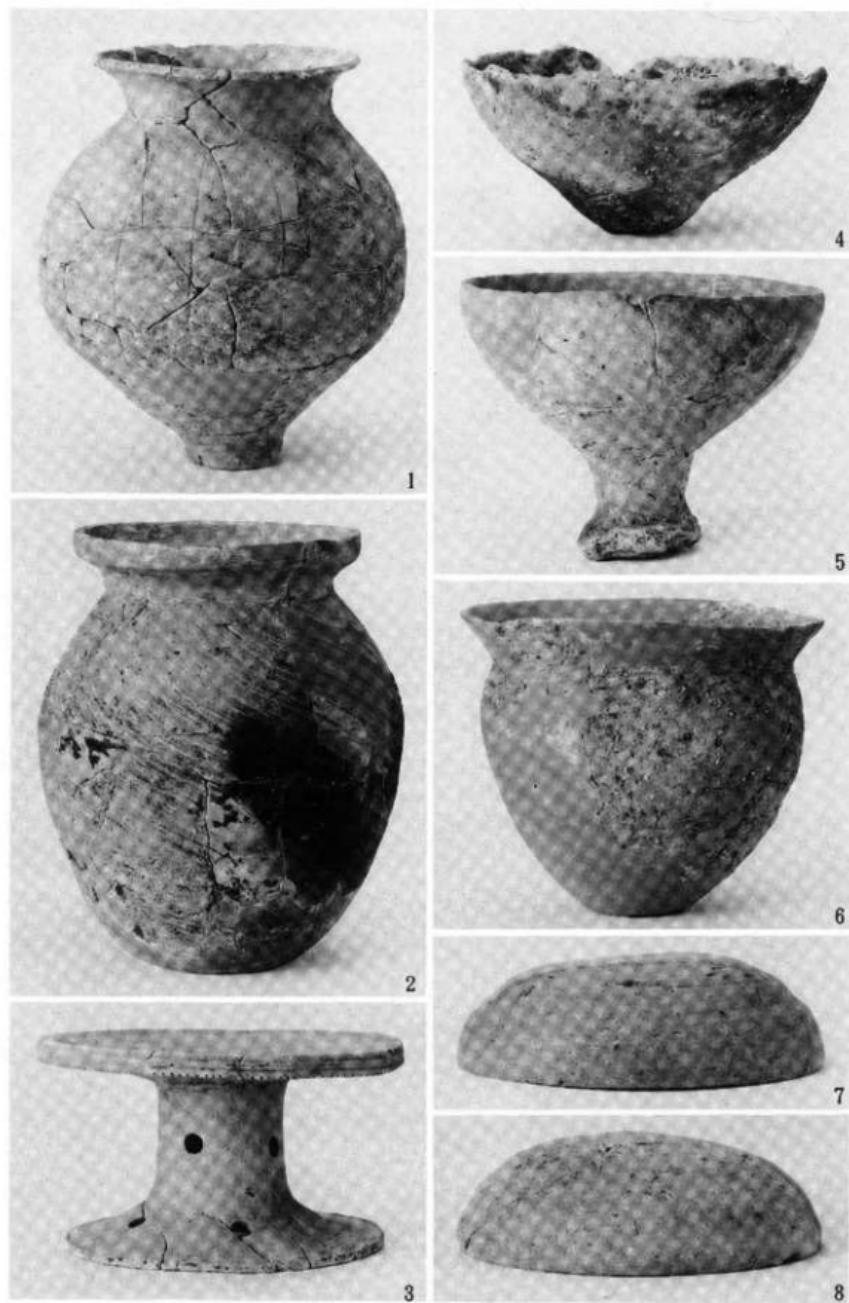
b. 24-B地区 東側調査区（北側から）



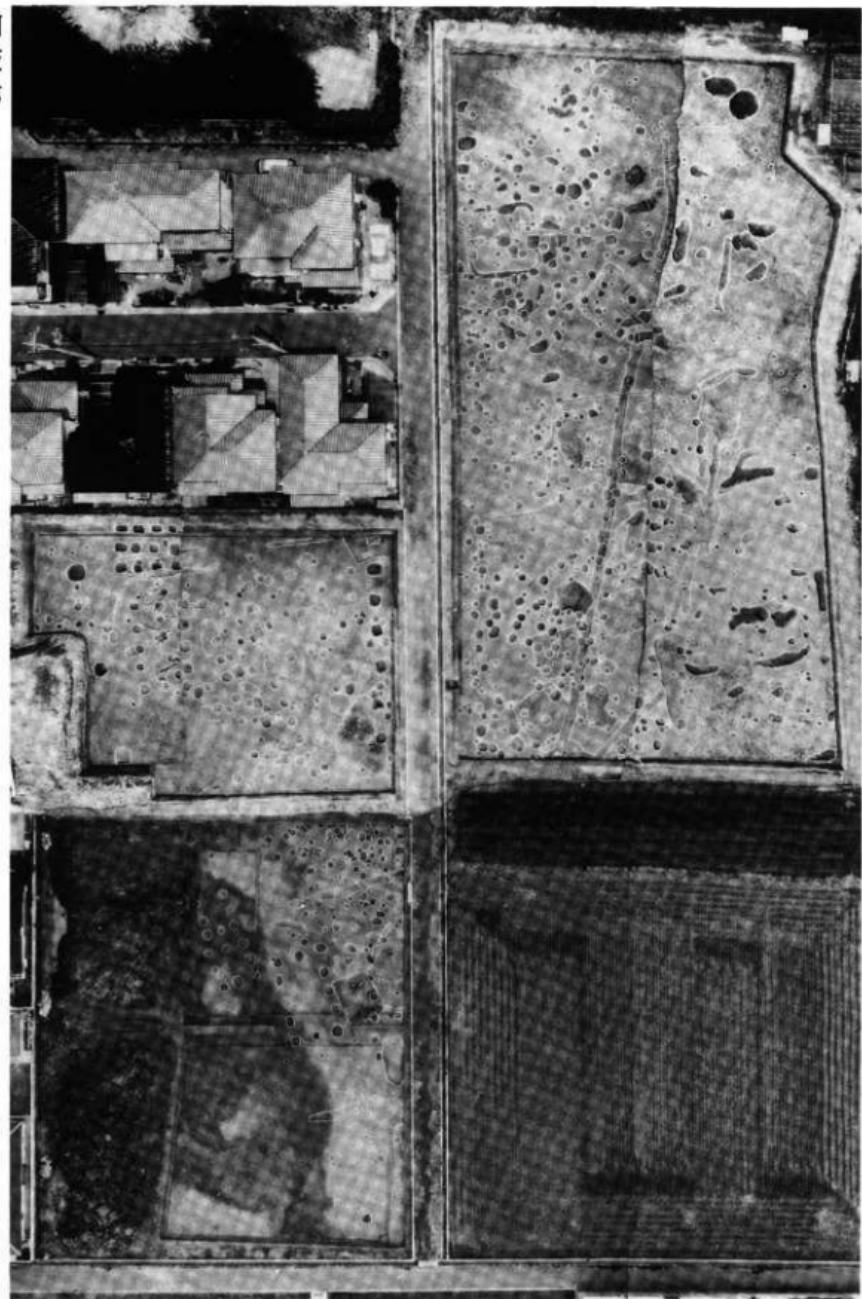
a. 24-B地区 堀立柱建物1（東側から）



b. 24-B地区 堅立式住居1（南東から）



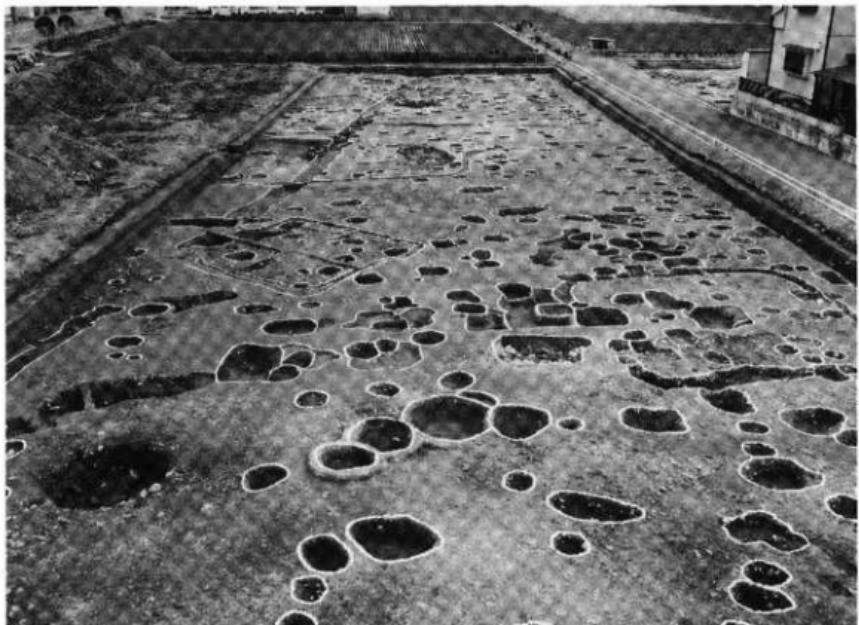
24-B地区 堅立式住居（1～3）土壤18（4～6）土壤6（7）土壤3（8）



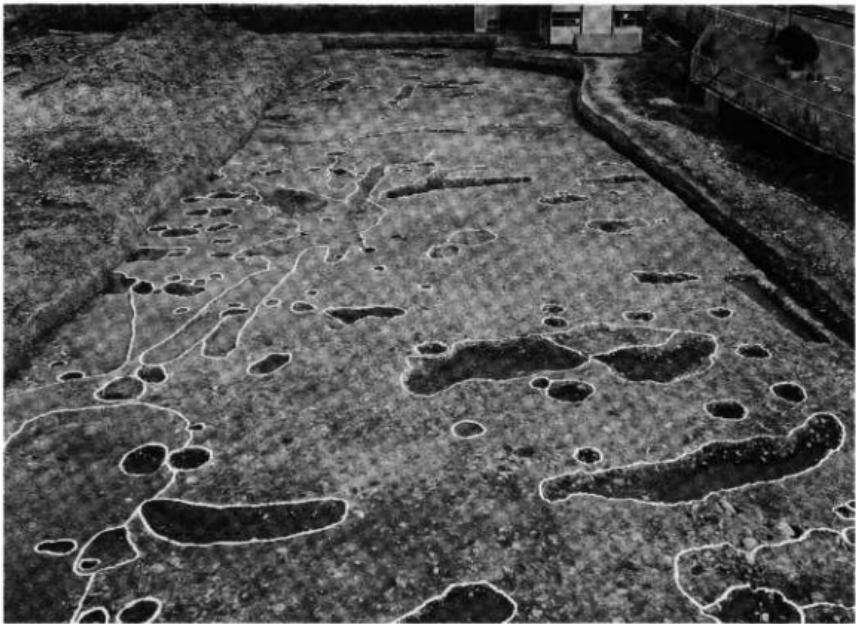
45-L地区 調査区全景（航空写真）



a. 45-L地区 A区西半全景（南側から）



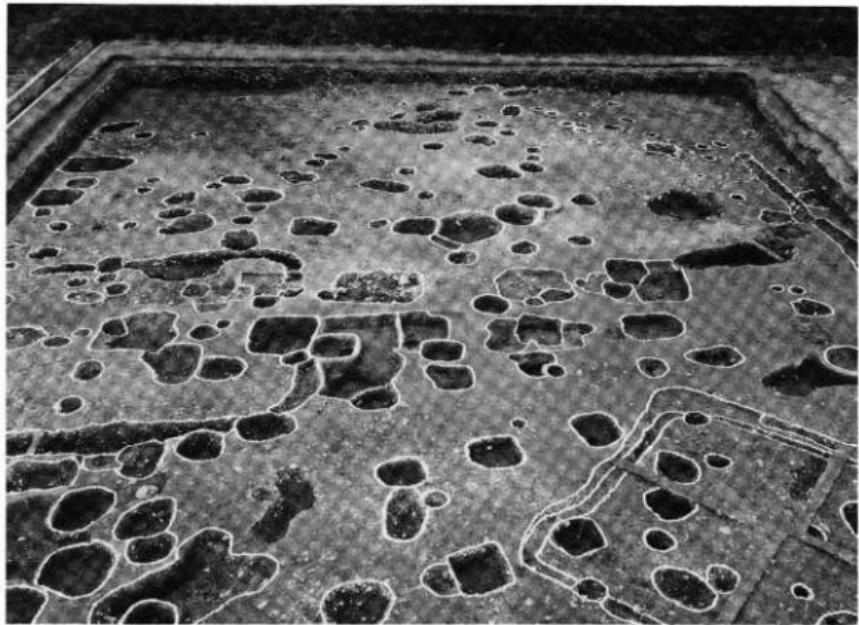
b. 45-L地区 A区西半全景（北側から）



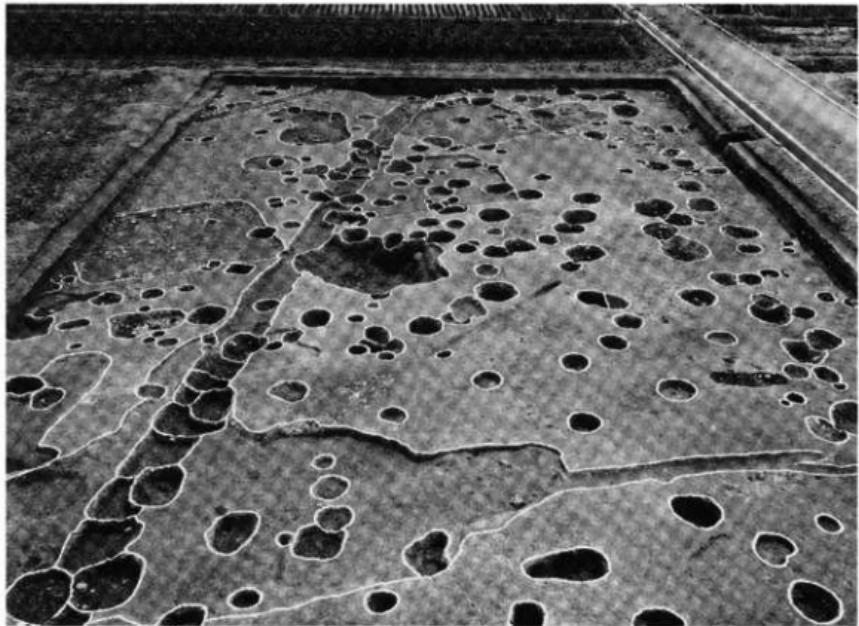
a. 45-L地区 A区東半全景（南側から）



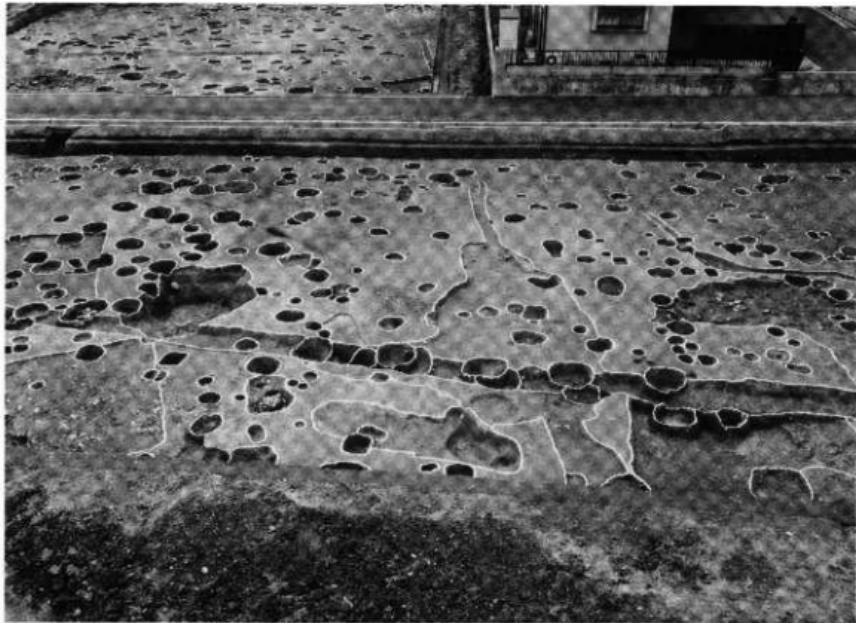
b. 45-L地区 A区東半全景（北側から）



a. 45-L地区 A区西半北部（南側から）



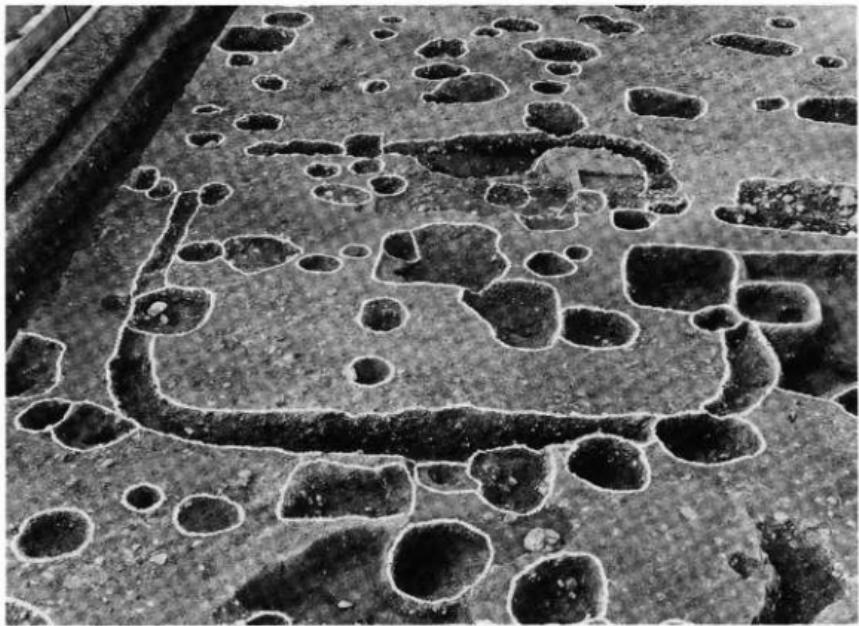
b. 45-L地区 A区西半南部（北側から）



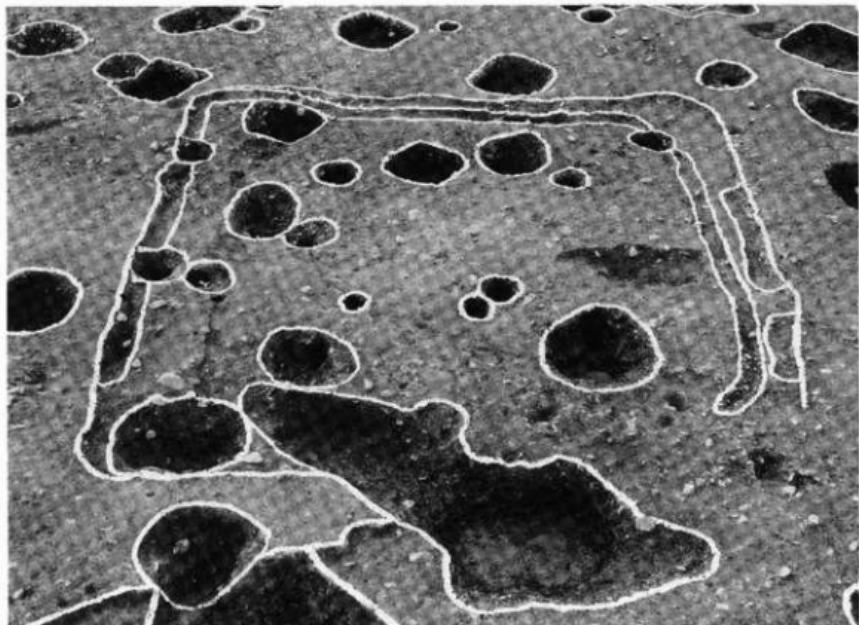
a. 45-L地区 A区西半中央部（東側から）



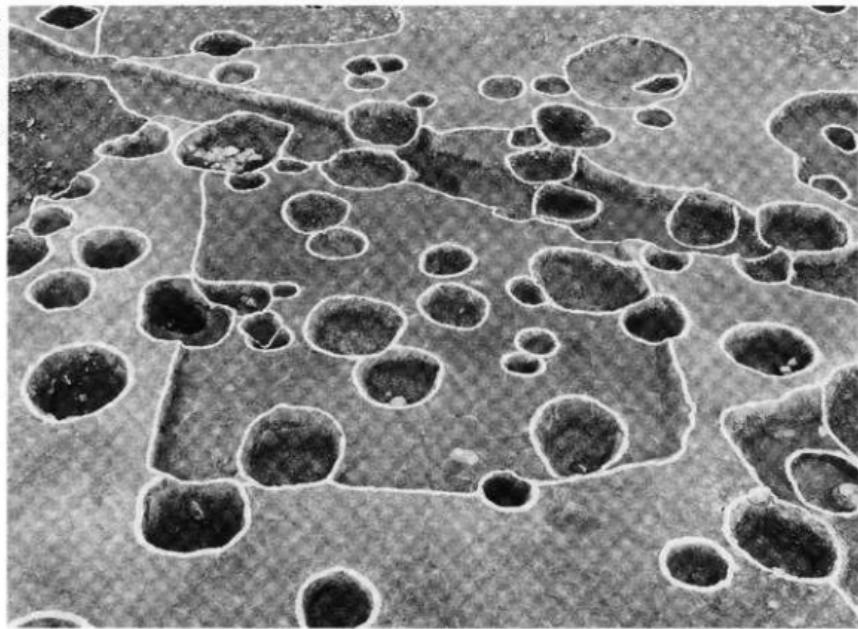
b. 45-L地区 A区東半北部（南側から）



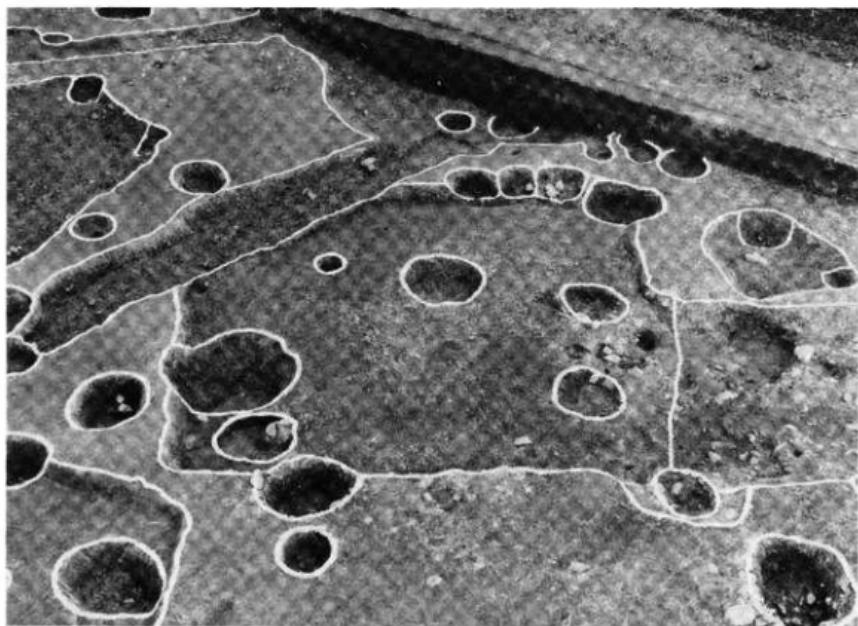
a. 45-L地区 SH1 (南側から)



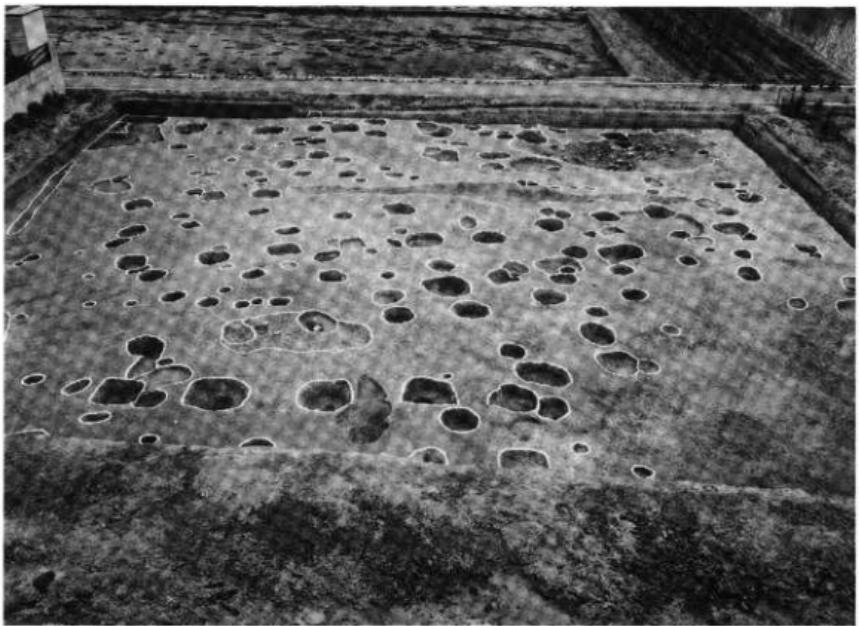
b. 45-L地区 SH2 (東南側から)



a. 45-L地区 SH 4 (西南側から)



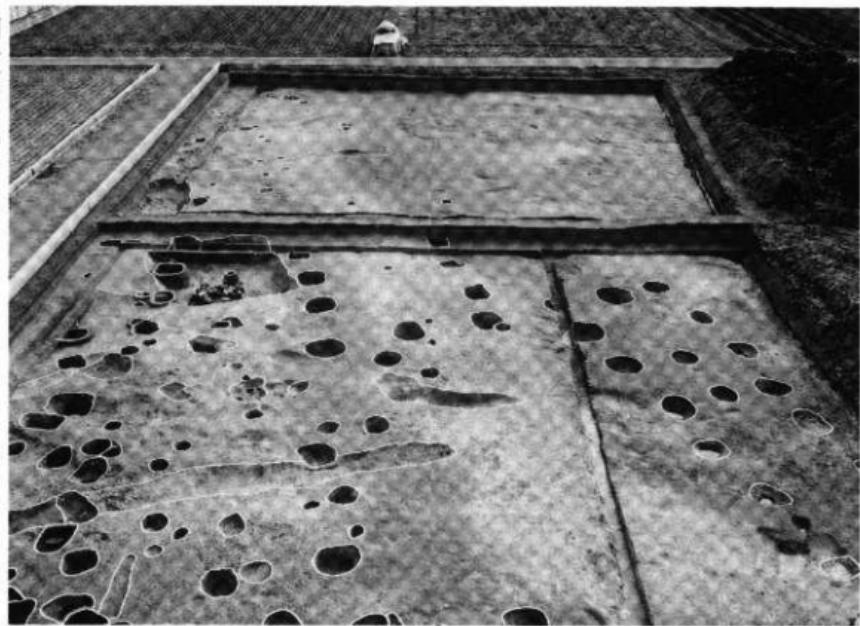
b. 45-L地区 SH 5 (北西側から)



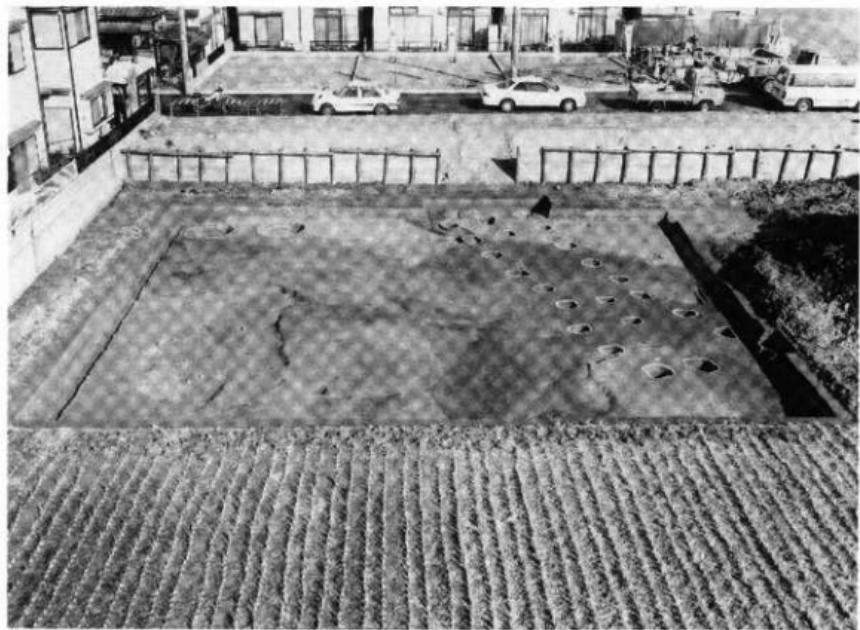
a. 45-L地区 B-1区 東半全景（西側から）



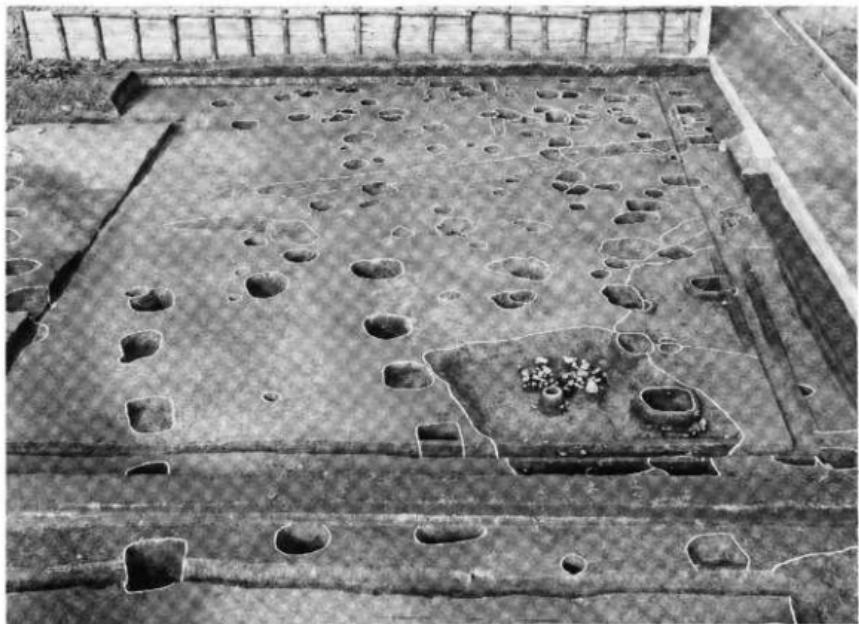
b. 45-L地区 B-1区 西半全景（南側から）



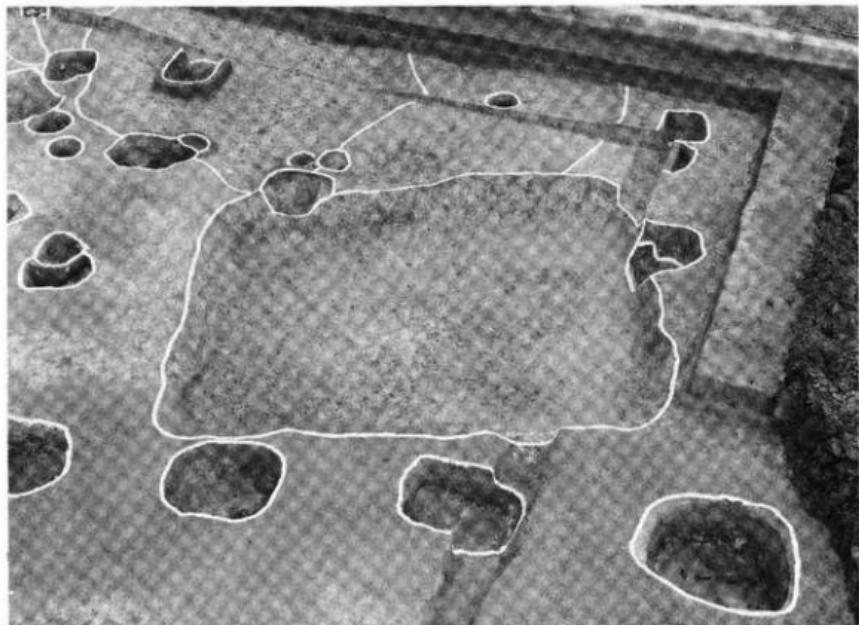
a. 45-L地区 B-2区 東半全景（北側から）



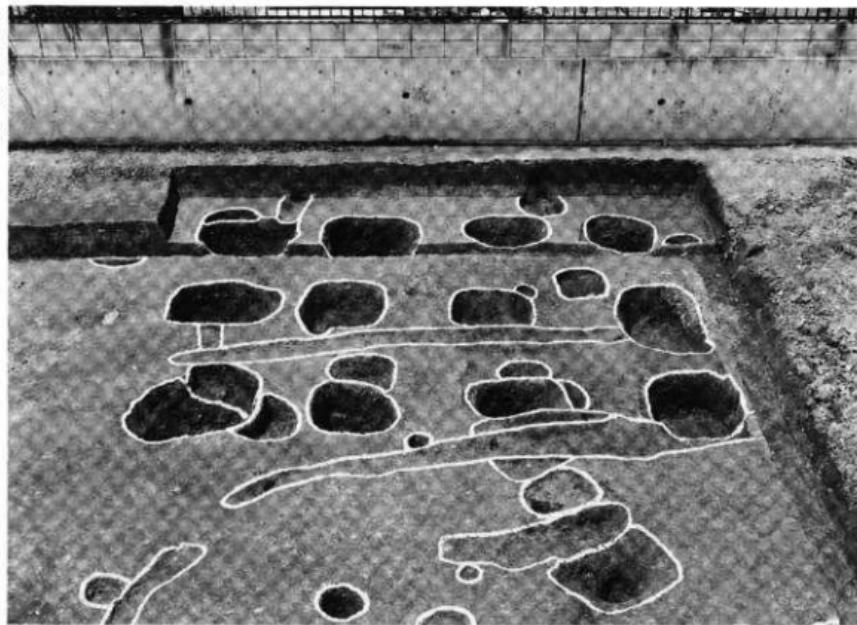
b. 45-L地区 B-2区 西半全景（南側から）



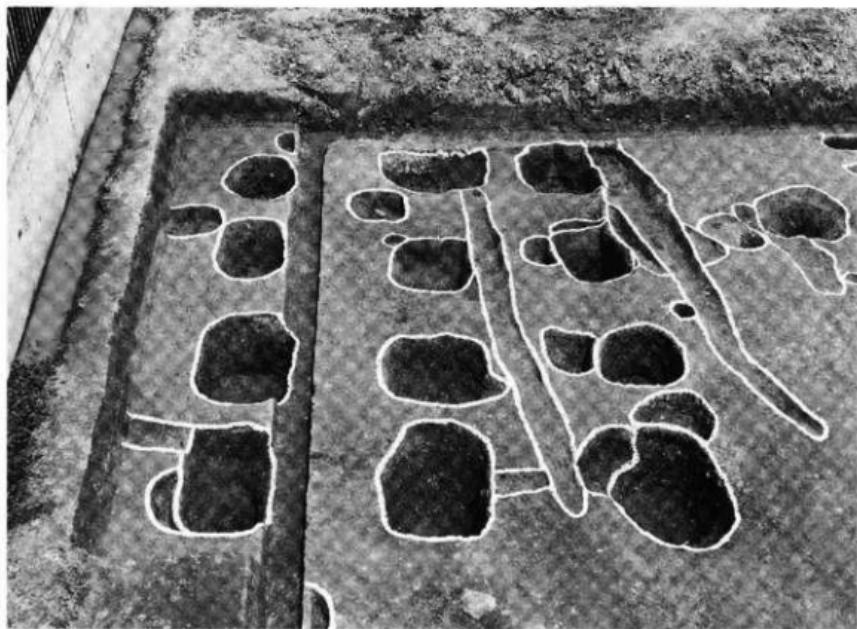
a. 45-L地区 B-2区 東半北部（南側から）



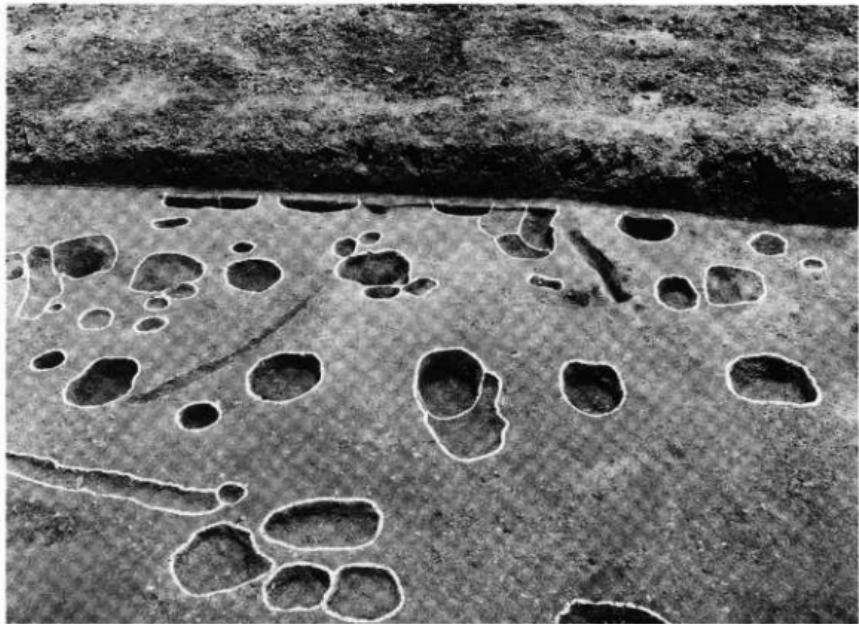
a. 45-L地区 SH7（西南側から）



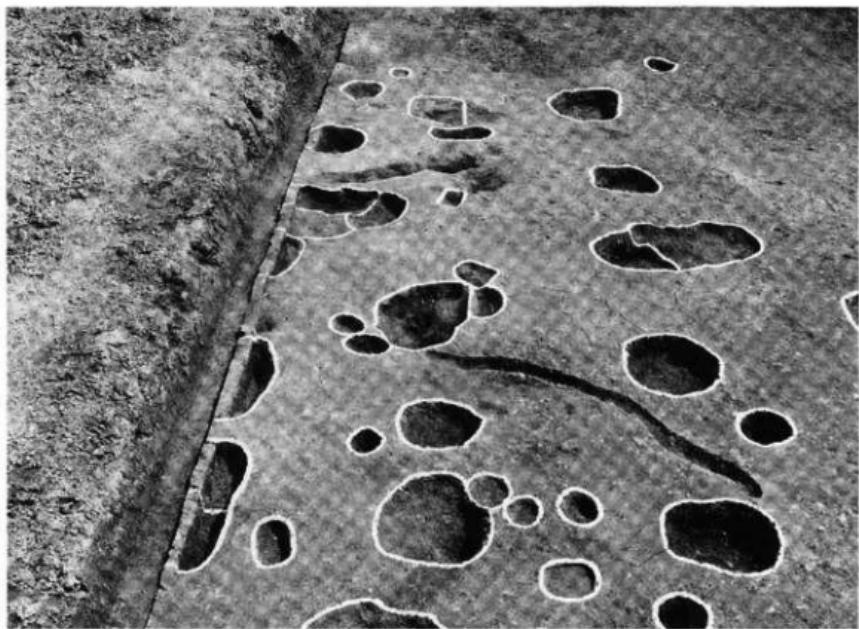
a. 45-L地区 SB24(南側から)



a. 45-L地区 SB24(西側から)



a. 45-L地区 SB25 (西側から)



b. 45-L地区 SB25 (北側から)